岐阜県文化財保護センター調査報告書　第41集

阿多粕遺跡

ふるさと林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

岐　阜　県
財団法人　岐阜県文化財保護センター

序

大野郡久々野町阿多粕地区は、太平洋側と日本海側を結ぶ国道41号線から東の谷筋を入った所に集落を営んでいます。この地は、急峻な飛騨川沿いの道が近世に改良されるまでは、古来より重要な街道であり、交通の要衝でありました。

このたび、ふるさと林道開設事業に伴い、埋蔵文化財の記録保存を行うために、阿多粕遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は高山山林事業所から岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

今回の発掘調査の結果、縄文時代早期の押型文土器をはじめ、縄文時代各時期の土器や石器が出土しました。土器には黒鉛入りのものがあり、また、石器類の中には下呂石や黒曜石もあったことから、この地は太古より、やはり交通の要衝であったことが明らかになりました。

最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関各位の温かい御理解と御協力を賜り感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々の多大なる御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　　篠　田　幸　男

例　　言

1．本書は岐阜県大野郡久々野町阿多粕字道下に所在する阿多粕遺跡（遺跡番号21606－00685）の発掘調査報告書である。

2．本調査はふるさと林道開設事業に伴うもので、高山山林事業所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は、平成９年度に実施し、渡辺誠名古屋大学文学部教授の指導のもとに上嶋善治が担当した。

4．本書に記載した遺物の実測は、次の者が主に行った。

縄文土器（拓本含む）　横井さだ子　畠中裕子　岩田　舞

石器　前畑裕美　上嶋善治　大石崇史

5．実測図等のトレースは次の者が主に行った。

脇渕純子　白栗由美　政井美子

6．遺物の写真撮影は佐藤右文氏に依頼した。

7．本書の執筆は、第２章第１節は藤岡比呂志が、他は上嶋が執筆したが、縄文土器については谷口和人・大石崇史、石器については上原真昭・大石崇史の協力を得た。編集は上嶋が行った。

9．空中写真撮影は㈱イビソクに委託して行った。

11．発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関から御助言・御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

吉朝則富　大石崇史　久々野町農林課　久々野町阿多粕地区

12．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た。

坂谷正道　川浦　泉　飯塚八十子　稲本　嗣　清水佐市　青木　茂　蒔田利光　渡瀬　保

清水　武　横井さだ子　畠中裕子　岩田　舞　前畑裕美　脇渕純子　白栗由美

13．土層および遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（1997）を参照した。

14．調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

序
例　言
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経緯 …… 3
第２章　遺跡の環境 …… 4
　第１節　阿多粕遺跡の地形・地質 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 7
第３章　調査の概要 …… 11
　第１節　基本的層序 …… 11
　第２節　遺物の概要 …… 13
　第３節　縄文土器 …… 14
　第４節　石 器 類 …… 25
第４章　ま と め …… 40
引用・参考文献 …… 41

図版目次

図版１　１．遺跡遠景　　２．発掘前の状況
図版２　１．遺跡全景　　２．発掘後の状況　　３．作業風景
図版３　１．７Ｂ区トレンチ北壁　　２．９Ｂトレンチ北壁　　３．10Ｂ～11Ｂ区北壁
図版４　１．14Ｂ区北壁　　２．遺物出土状況　　３．尖頭器出土状況
図版５　１．縄文土器　第Ⅰ・Ⅱ群　　２．縄文土器　第Ⅲ群
図版６　１．縄文土器　第Ⅳ群　　２．縄文土器　第Ⅴ・Ⅵ群
図版７　１．縄文土器　第Ⅶ群　　２．縄文土器　底部
図版８　１．石器類　石鏃・石錐・尖頭器・石匙　　２．石器類　削器・掻器
図版９　１．石器類　両極剥離痕のある石器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石核
　　２．石器類　打製石斧
図版10　１．石器類　磨石・凹石・敲石類

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　地区設定図 …… 2
第３図　阿多粕遺跡周辺の接峰面図 …… 5
第４図　阿多粕遺跡周辺の地質図 …… 6
第５図　阿多粕遺跡および周辺の遺跡 …… 9
第６図　土層図 …… 12
第７図　遺物の出土状況 …… 13
第８図　縄文土器(1)第Ⅰ・Ⅱ群 …… 15
第９図　縄文土器(2)第Ⅲ群 …… 17
第10図　縄文土器(3)第Ⅳ群 …… 18
第11図　縄文土器(4)第Ⅴ・Ⅵ群 …… 19
第12図　縄文土器(5)第Ⅶ群 …… 20
第13図　縄文土器(6)底部 …… 21
第14図　石器類(1)石鏃・石錐・尖頭器 …… 27
第15図　石器類(2)石匙・削器 …… 29
第16図　石器類(3)掻器・両極剥離痕のある石器 …… 30
第17図　石器類(4)二次加工のある剥離・使用痕のある剥片・石核 …… 33
第18図　石器類(5)打製石斧 …… 34
第19図　石器類(6)磨石・凹石・敲石類 …… 35

付表目次

第１表　阿多粕遺跡周辺の遺跡 …… 10
第２表　縄文土器観察表 …… 22
第３表　石器一覧表 …… 36

第１章　調査の経緯

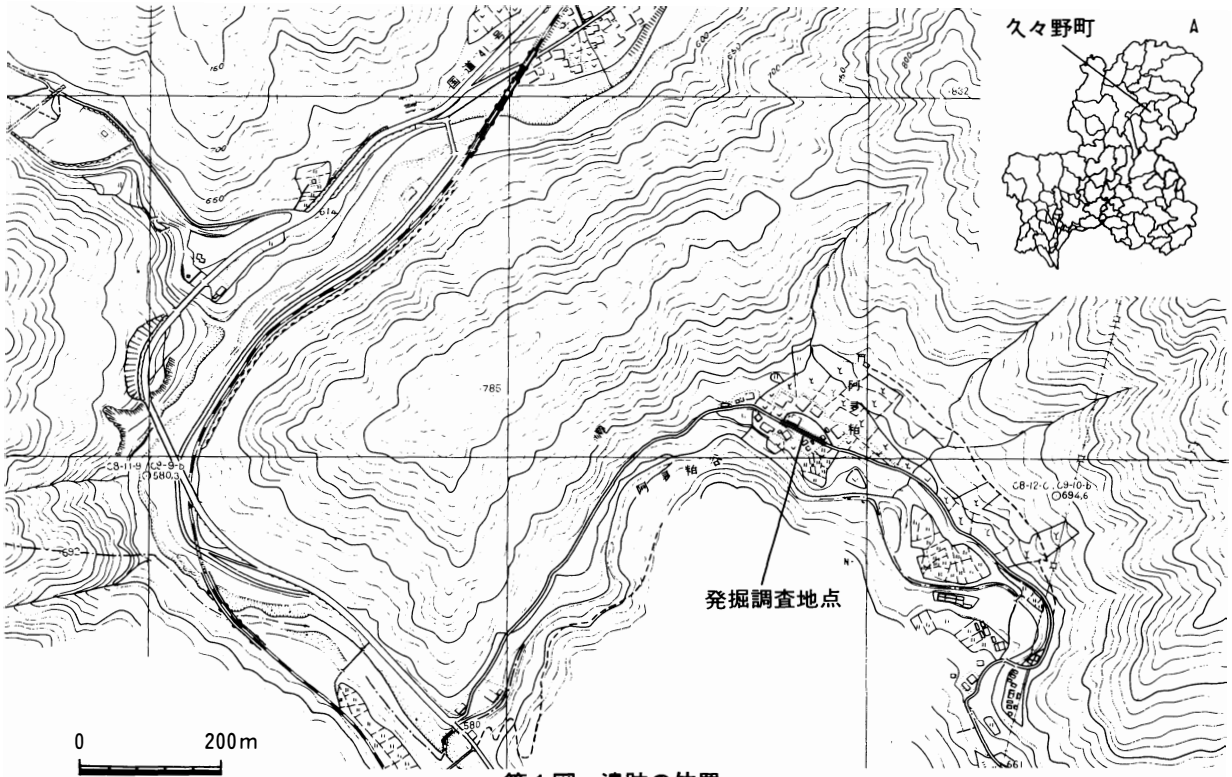
第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査で阿多粕遺跡が対象となったのは、高山山林事業所のふるさと林道開設事業による。この遺跡は、縄文時代の遺物散布地として知られており、工事予定地点の周辺では、縄文土器片、石器類が表面採集されていた。

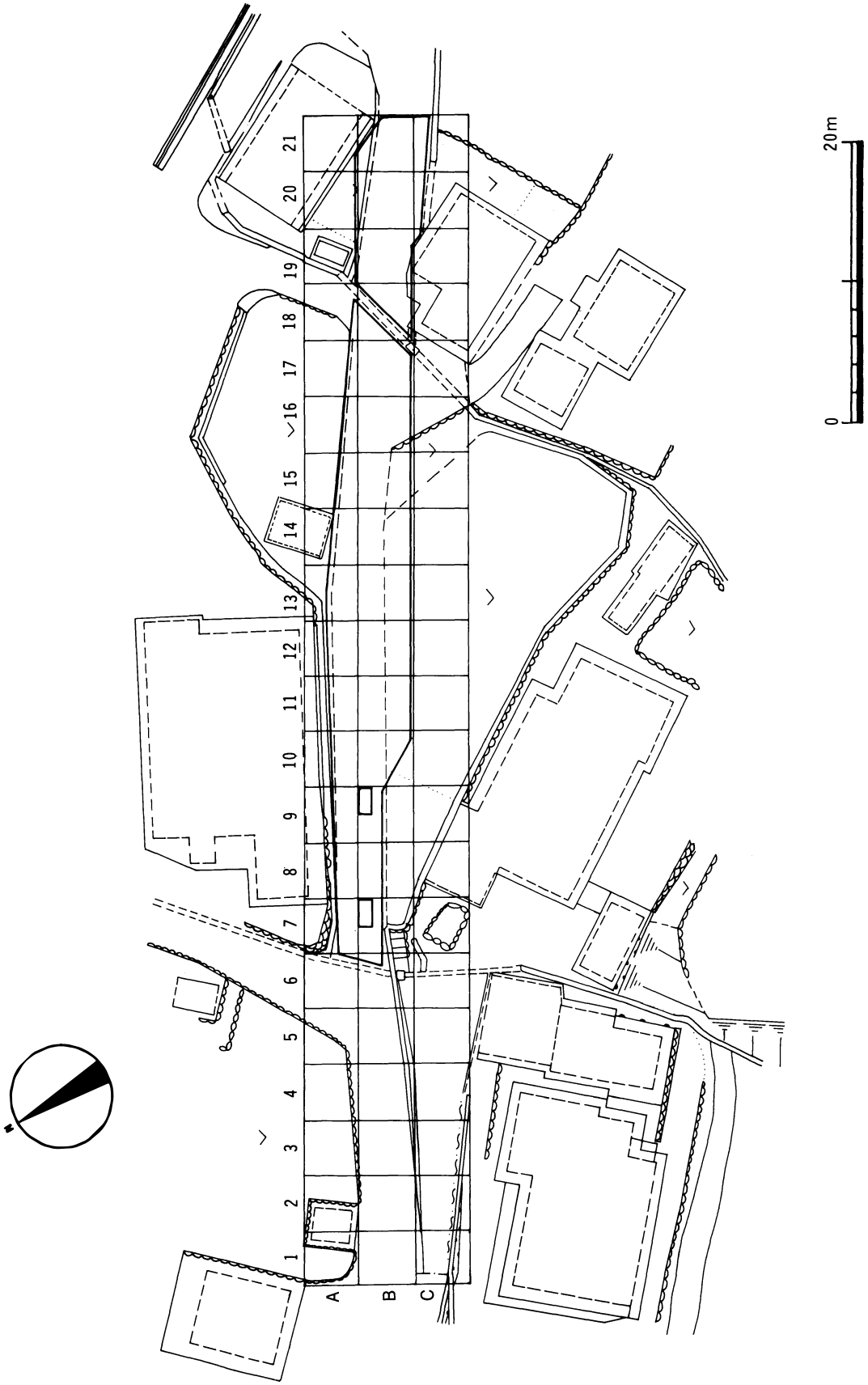
平成７年８月22日に、岐阜県教育委員会文化課と㈶岐阜県文化財保護センターによって事前の踏査を行い、道路に隣接する畑から石匙１点、土器片・下呂石のフレイク類等多数が表採できた。また、同年11月20日に、高山山林事業所、久々野町農林課と㈶岐阜県文化財保護センターの三者が立ち会って、試掘調査を行った。試掘調査は、道路周辺の畑地に３か所手掘りでトレンチを入れた。遺物は出土しなかったが、遺物包含層の可能性のある土層が見られた。

現道部分を掘削するため迂回路を確保して発掘調査を行うことになり、調査可能な地点300㎡を発掘調査することになった。

発掘調査にあたっての地区の設定は、設計予定の道路の方向に合わせて４×４ｍのグリッド設定を行った。北からＡ列・Ｂ列・Ｃ列とし、西から東へ１列・２列・３列とした。発掘調査を進めて行く段階で西側は、遺物の密度が非常に薄く、９列のあたりから西側は谷地形になっていることが判明した。従って、西側の６列までは、掘削の必要がなくなった。また、７列から９列までは、部分的なトレンチ掘りとし、それより東側は平面発掘とした。



第１図　遺跡の位置



第2図　地区設定図

第２節　発掘調査の経緯

現地での調査は、５月上旬に現場事務所の設営や用具の搬入を行い、５月中旬より作業を開始した。以下、週ごとに調査経過を記述する。

第１週（5.12～5.16）重機を利用して、現道の舗装を剥いだ。アスファルトの下のバラス層まで除去した。人力による掘削を15日から開始の予定であったが、雨天のため翌16日から開始した。

第２週（5.19～5.23）調査地点の中央部の湧水を迂回させた。19Ｂ区から21Ｂ区のあたりは第Ⅱ層から第Ⅲ層にかけて掘削が進んだ。21Ｂ区では押型文土器片が出土し、黒鉛入り土器も出土した。20Ｂ区では無文の土器片が比較的集中して出土した。７Ｂ区で土層観察のためのトレンチを入れた。西方は谷地形になっており深い。遺物の出土もほとんどない。

第３週（5.26～5.29）20Ｂ区から条痕文の土器片が出土しており、縄文晩期と推定された。16Ｂ区から17Ｂ区にかけて、第Ⅱ層から第Ⅲ層の掘削を始めた。16Ｂ区は下呂石の剥片類が多く、17Ｂ区では、無文の土器片が多く出土する。９Ｂ区にトレンチを入れた。９Ｂ区のあたりまでは、遺物がほとんど出土しない。

第４週（6.2～6.5）雨天の日が多い。16Ｂ区で加曽利Ｂ２式の羽状沈線文の土器片が出土。10Ｂ区から４Ｂ区の第Ⅱ層から第Ⅲ層を掘削した。遺物は少ない。

第５週（6.9～6.13）17Ｂ区では、土器片が集中的に出土した。遺構検出作業を合わせて行ったが検出されなかった。15Ｂ区から16Ｂ区にかけて有茎式の石鏃が出土した。第Ⅲ層の下方に砂混じりの層を挟んで最下層に黒色土層があり、ⅢＬ層とした。主として縄文早期の遺物が出土する。

第６週（6.16～6.19）16Ｂ区で浮線文系土器が出土した。12Ｂ区から14Ｂ区北壁のセクションを実測し、北側へ掘り広げた。15Ｂ区南側で土器が集中的に出土した。縄文地に凹線文が施された土器である。

第７週（6.23～6.27）15Ｂ区から16Ｂ区および10Ｂ区から11Ｂ区の北壁のセクションを実測した。最下層は、亜角礫の点在する砂礫層である。11Ｂ区から12Ｂ区のあたりは、水がしみ出てきた。砂礫層の直上でわずかに遺物が出土する。

第８週（6.30～7.4）調査区全域の清掃作業を行い、空中写真撮影を実施した。７月４日で現地での発掘調査を終了した。なお、７月７日までに埋め戻し作業を終了した。

以後、財団法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所にて整理作業を行った。

第２章　遺跡の環境

第１節　阿多粕遺跡の地形・地質

１　阿多粕遺跡周辺の地形

本調査地域は、久々野町の飛騨川支流阿多粕川沿いに位置する。周囲を見ると、東方12～13㎞には鈴蘭高原が広がり、東南方約20㎞には御嶽山が位置する。

第３図に、阿多粕遺跡周辺の接峰面図を示した。この地域の地形を概観すると、御嶽火山を除いては、一般に、標高1,400～1,700ｍの山頂高度をもち、その中でも南方に位置する御前山、東方に位置する濁河山、法仙峰などの山頂周辺部には小起伏浸食面[1)]が認められる。また、これらの1,600～1,700ｍの小起伏面の少し下位に、標高1,200～1,500ｍの小起伏面が東方の鈴蘭高原一帯に広がっている。

これらの山地を流れる河川は、飛騨川とその支流であり、木曽川水系に属する。阿多粕遺跡周辺の山地は、飛騨川本流及びその支流によって深く下刻され、谷筋と尾根筋との比高は一般に500ｍを越えている。なかでも、御前山とその西側の飛騨川本流との比高は1,300ｍにも達する。阿多粕遺跡は標高が630ｍ弱であるが、すぐ南の山頂は約920ｍであり、北の山頂は約1,000ｍである。周辺ほど険しくはないが、300～400ｍ程度の高度差がある。阿多粕遺跡の南を流れる阿多粕川は、羽毛状の河系を呈し、支流は非常に短い。

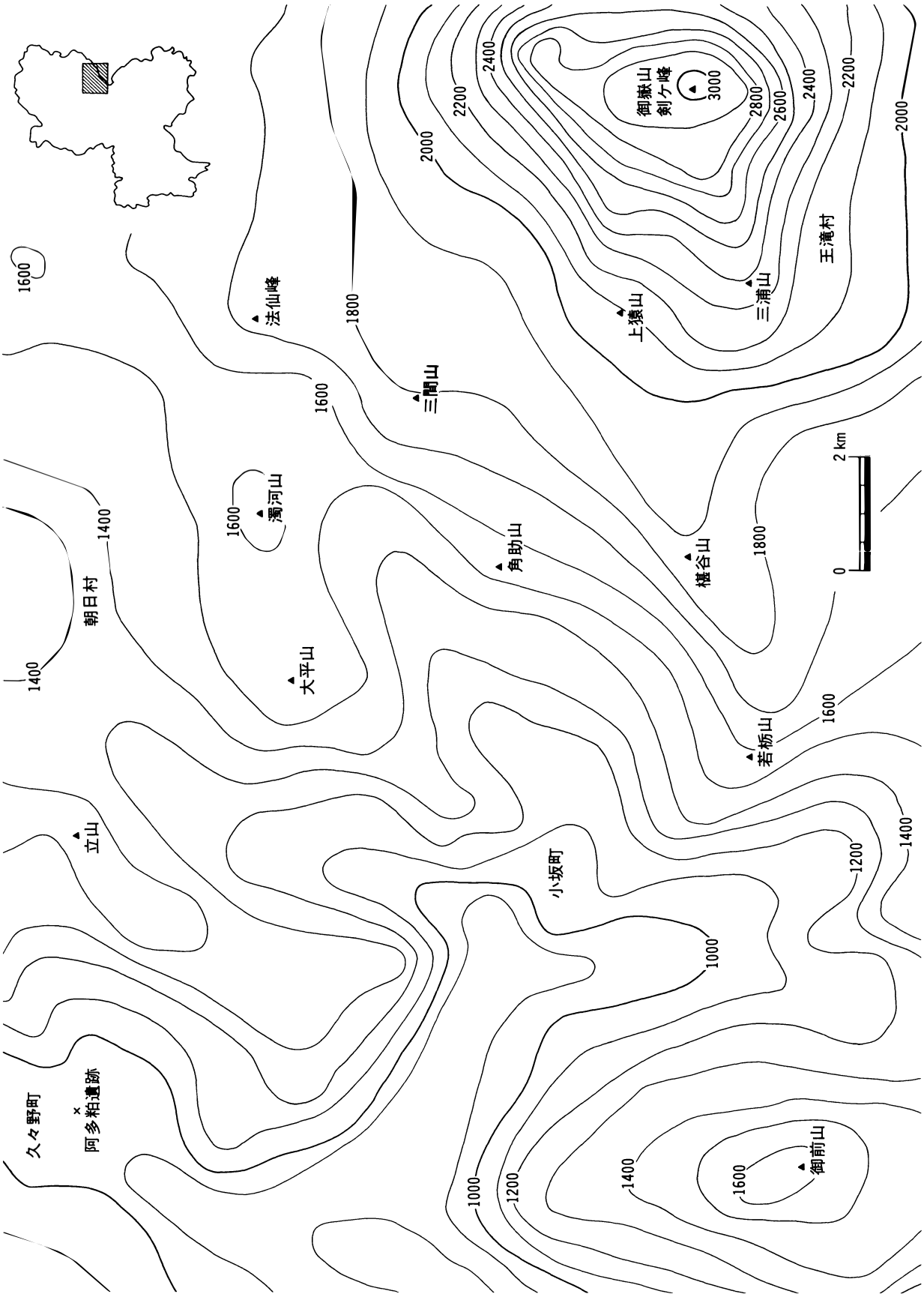
阿多粕遺跡は、阿多粕川の支流による扇状地上に存在する。ただし、支流は短いため、扇状地として小さく、平均勾配は約2／10（平均傾斜角は約11°）であり、やや勾配は急である。

２　阿多粕遺跡周辺の地質

阿多粕遺跡周辺の地質図を第４図に示した。阿多粕遺跡周辺には、濃飛流紋岩が広く分布する。濃飛流紋岩は、岐阜県全体の約１／３に分布する大規模な火山岩体である。これは、中生代白亜紀[2)]後期（約9,000万～約6,500万年前）に噴出し、主に流紋岩～流紋デイサイト質の溶結凝灰岩[3)]からなる。この濃飛流紋岩を貫く花こう斑岩および花こう閃緑斑岩の岩体がいくつか飛騨川沿いに分布する。その中で一番大きな岩体が、本調査地域の南西約３㎞に北北西－南南東にのびる幅0.2～１㎞、長さ約４㎞の花こう斑岩である。

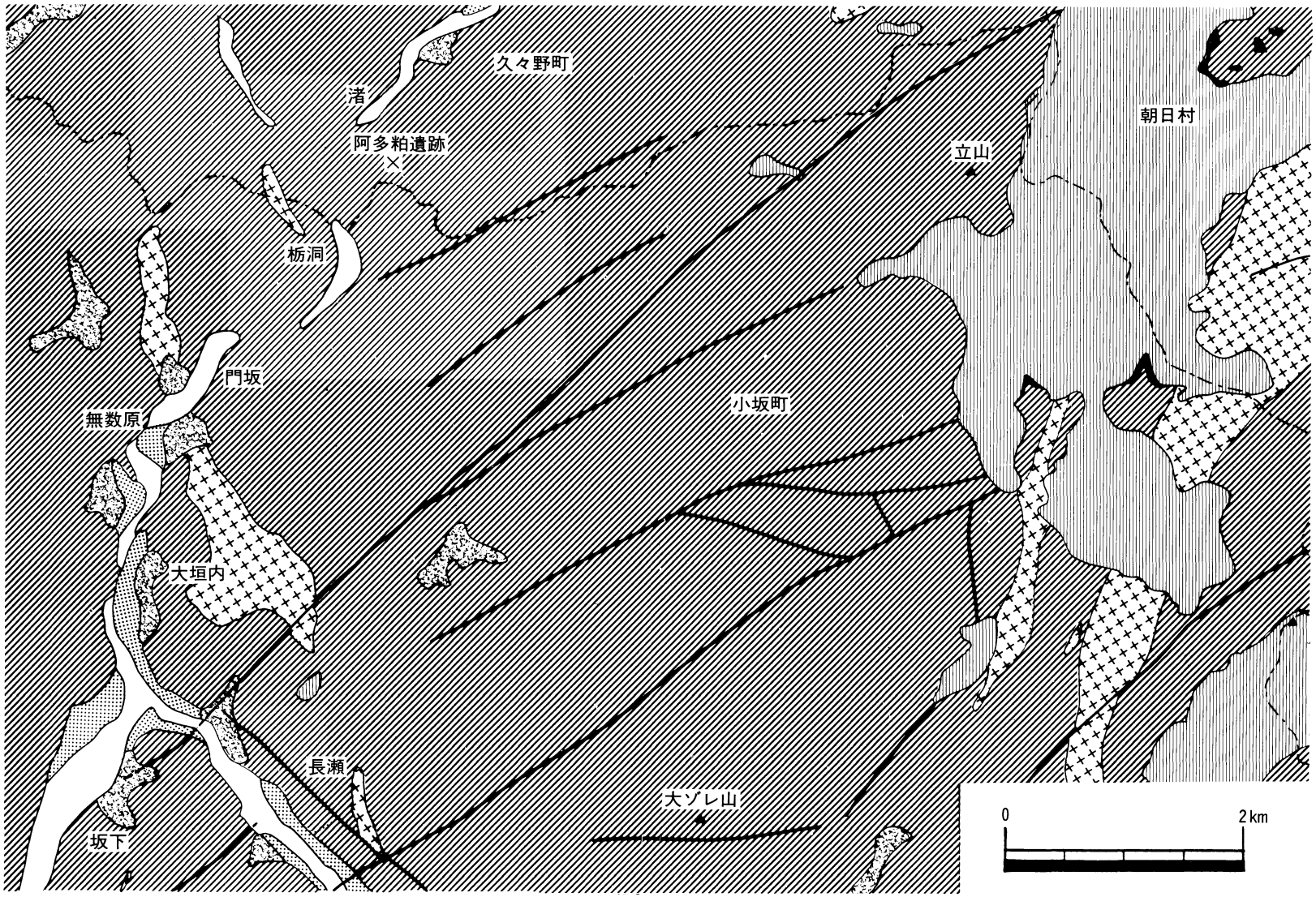
また、阿多粕川の上流から南にかけていくつかの岩体に分かれて、鈴蘭高原玄武岩と呼ばれる玄武岩が分布する。大きな岩体は、小坂町・朝日村境の鈴蘭高原一帯に南北約６㎞、東西約５㎞に分布する岩体と、その南方の大平山付近に分布する岩体の２つである。それ以外は、小岩体として分布し、各所で濃飛流紋岩類を貫いている。

このような地質であるため、阿多粕遺跡の南を流れる阿多粕川の礫は、90％ほどが濃飛流紋岩、約10％が玄武岩である。



第３図　阿多粕遺跡周辺の接峰面図

（1:50,000地形図「御嶽山」を一辺２㎞方眼の最高点の標高にもとづいて等高線作図）



濃飛流紋岩類
花こう斑岩及び花こう閃緑斑岩
丹生川火砕流堆積物
鈴蘭高原玄武岩
段丘堆積物
崖錐・崩積堆積物
沖積層
断　層
伏在断層

第4図　阿多粕遺跡周辺の地質図
（5万分の1地質図幅「御嶽山」地質調査所を一部改変）

参考文献
御嶽山地域の地質（1988）　山田直利・小林武彦　地質調査所
地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)
新版　地学事典　地学団体研究会編　平凡社

1)　小起伏浸食面……陸上において、様々な要因によって削り取られ形成された起伏の小さい波状の浸食面をさす。
2)　白亜紀……中生代を三分したうちの最後の地質年代で、約１億4,560万年～約6,500万年前の約8,060万年をさす。
3)　溶結凝灰岩……火山灰やその他の火山放出物が、高温の火砕流として火山体を流下し堆積した場合、堆積物の内部は高温のため火山ガラスなどの物質が一度溶融し、結合しあうことがある。そのような岩石を溶結凝灰岩と呼ぶ。

第２節　歴史的環境

阿多粕遺跡は、大野郡久々野町阿多粕字道下に所在する。阿多粕集落は、久々野町の南端に位置し、益田郡小坂町と隣接する。東方の阿多粕谷と方願谷の二つの谷川を合わせた阿多粕川が西流して飛騨川と合流する。集落の北側に山々が迫っており、谷川の右岸に広がる扇状地上に遺跡が立地する。

以前から縄文時代の遺物散布地として知られていたが、詳細は不明であった（岐阜県教委1990)。事前の踏査および試掘調査の結果、下呂石製の石匙・剥片類などの石器類が出土していた。

この地には、1790（寛政２）年に廃止された阿多粕口留番所が置かれていた。益田方面より信州へ通ずる玄関口であった。

現在、飛騨地方の中心を縦断する国道41号線は、益田郡萩原町から小坂町および久々野町の中央部を抜けて宮峠を越えて、大野郡宮村、高山市へと続く。しかし、古代における官道は、萩原町の上呂で飛騨川の右岸に渡り、萩原町山之口を経て位山峠を越えて、宮村へ通じていた。

天正年間（1573～92）になって、金森長近によって久々野－渚－小坂の河内路の難所が開発された。河内郷は、現在の久々野町の引下、木賊洞、長淀の３地区を言う。この辺りは飛騨川が曲流し、交通の難所であった。従って、上呂以北から高山へ向かう人は阿多粕から大野郡朝日村の黍生谷、甲、美女峠を経由した方が安全であった（菱村ほか1972)。

つまり、阿多粕の地は現在は国道から東に入った地区であるが、かつては交通の要衝であった。そして、発掘調査地点は、現道の舗装を剥いでから調査したが、「道下」という字名からも分かるようにかつての道は、北の山側を通っていた。

さて、阿多粕遺跡周辺の遺跡の分布を見ると、飛騨川の沿岸あるいは谷に入った所に縄文時代の遺跡が点在する。また、阿多粕から東へ向かい細越峠を越えて、大野郡朝日村に入ると、秋神川流域に縄文遺跡が散在している。発掘調査された遺跡等を中心に、そのいくつかを概要をまとめると次のようになる。

藤原遺跡

1992（平成4）年に㈶岐阜県文化財保護センターによって発掘調査が行われた。遺構としては、ピット、土坑および配石遺構である。配石遺構は、縄文早期のいわゆる焼礫集積遺構の一種と考えられる。遺物としては、縄文早期の茅山下層式の土器や、後期の前葉から中葉にかけての土器、石器類が出土している。また、わずかに押型文土器や黒鉛入り土器も出土しており、当遺跡との出土遺物の時期的な関係が注目される（上嶋1993)。

渚遺跡

高山線鉄道工事に伴う家屋移転の際に、縄文土器の口縁部が見つかっている。内部に灰が入っていたと言われる。土器を埋設した炉の可能性もある（林1938)。また、その付近から縄文中期の土器の完形品が出土しており、いわゆる手焙形土器と報告されている（江馬1937)。

門坂シズマ遺跡

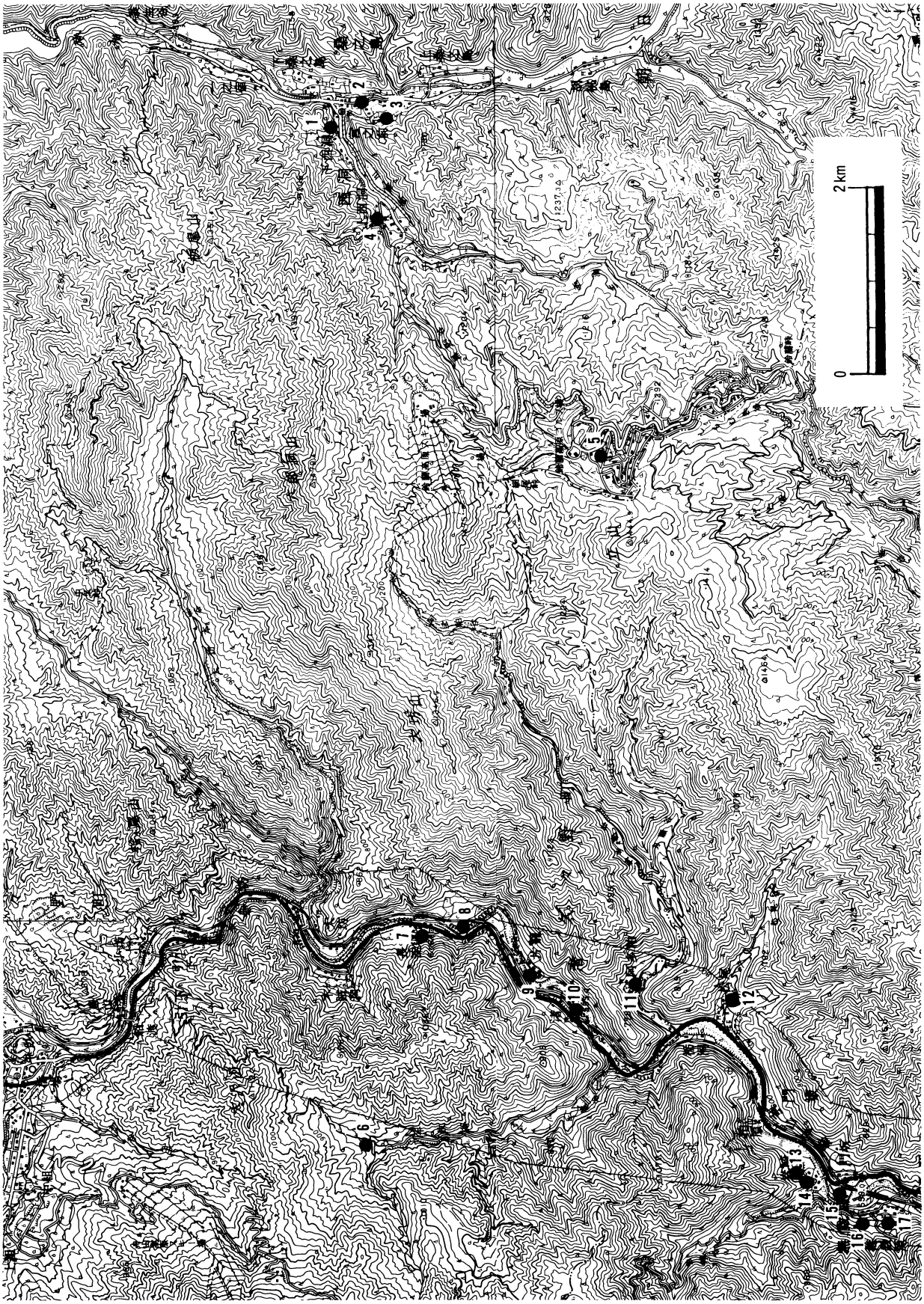
1991（平成3）年に㈶岐阜県文化財保護センターによって発掘調査が行われた。遺構としては、竪穴住居跡を想定させるピット群が2か所検出され、縄文時代中期初頭の土器が比較的まとまって出土した（上嶋1992)。出土土器の型式としては鷹島式とともに新保式が伴っており、飛騨地方の縄文中期初頭の土器編年の検討資料となっている（増子1995)。

中道遺跡

1966（昭和41）年に、山麓の畑地を造成工事する際に、小林繁氏によって採集された遺物が報告され（小林1969)、さらに『岐阜県史』で取り上げられている（大参1972)。遺物は、縄文土器と石器類であるが、土器は押型文土器である。山形文、格子目文、楕円文、山形と楕円の複合文がある。山形文は、口縁に沿って帯状に施文され、さらに縦の施文が加えられたり、縦の沈線が刻まれているものもある。また、黒鉛入りのものもある。後述するように阿多粕遺跡の押型文土器との類似点が指摘できる。

西洞遺跡

海抜1350ｍの高地に位置する。ゴルフ場建設の際に、いわゆる神子柴型の大型尖頭器が1点出土した。石材は珪質頁岩製であるが、原石は長野県北部から新潟県にかけて産出すると言われている。大きさは、長さ14.6㎝、幅4.5㎝である（小林1970)。



第５図　阿多粕遺跡および周辺の遺跡

第1表　阿多粕遺跡周辺の遺跡（岐阜県教育委員会『岐阜県遺跡地図』1990をもとに作成）

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	時　代	備　　考
1	中道遺跡	大野郡朝日村西洞中道	縄文	文献（小林1969）
2	新井遺跡	大野郡朝日村宮ノ前新井	縄文	
3	寺垣内遺跡	大野郡朝日村宮ノ前寺垣内	縄文	
4	津島遺跡	大野郡朝日村西洞津島	縄文	
5	西洞遺跡	大野郡朝日村西洞大沼原	縄文	1968（昭和43）年ゴルフ場建設により一部滅失
6	牛牧遺跡	大野郡久々野町渚牛牧	縄文	
7	長淀遺跡	大野郡久々野町長淀筏場	縄文	
8	藤原遺跡	大野郡久々野町渚ヲトシロ	縄文	1992（平成4）年発掘調査
9	片篭遺跡	大野郡久々野町渚上林	縄文	
10	渚遺跡	大野郡久々野町渚奥垣内	縄文	
11	阿多粕遺跡	大野郡久々野町阿多粕道下	縄文	
12	松尾遺跡	益田郡小坂町門坂松尾洞	縄文	
13	川原なぎ遺跡	益田郡小坂町岩崎川原ナギ	縄文	
14	岩崎神社遺跡	益田郡小坂町岩崎上田	縄文	
15	門坂シズマ遺跡	益田郡小坂町門坂シズマ	縄文	1991（平成3）年発掘調査
16	杉山遺跡	益田郡小坂町無数原杉山	縄文	
17	森ケ平遺跡	益田郡小坂町無数原森ケ平	縄文・弥生	

第３章　調査の概要

第１節　基本的層序

今回の発掘調査では、明確な遺構は検出されなかった。調査地点は、北から南へ土砂の流れ込みが激しく、西方は谷地形になっており、複雑な層位を示している。出土する遺物は磨耗が激しいことから、今回の発掘調査地点は、本来の遺跡の中心部をはずれた地点であるようである。遺物の包含層は、大きく２層に分層できるが、後述する遺物の出土状況にも反映している。

第Ⅰ層　表土は、道路部分では舗装面およびその下の埋土であり、畑地では耕作土である。前者は、約20ｃｍの厚さであり、後者は、約40～50ｃｍの厚さで堆積していた。

Ⅰａ層　黒褐色土（10YR3／1）しまり、粘性ともに弱い。径１～２ｃｍの礫を含む。耕作土。

Ⅰｂ層　灰白色土（5YR7／1）よくしまっている。粘性はない。３～10ｃｍの角礫を含む。舗装下の砂利を敷いた部分である。

第Ⅱ層　埋土および流れ込んだ土層と考えられる。東方は薄く約30㎝の厚さであるが、西へ向かうほど厚くなり、７Ｂ区では１ｍ以上になる。

Ⅱａ層　黒褐色土（10YR3／2）しまりはあるが、粘性は弱い。

Ⅱｂ層　暗灰黄色土（2.5Y4／2）しまりはあるが、粘性は弱い。径２～３ｃｍの礫が混じる。

Ⅱｃ層　黒褐色土（7.5YR3／1）しまりはあるが、粘性は弱い。径３～５㎝の礫が混じる。

Ⅱｄ層　黄橙色土（10YR7／8）しまりがあり、粘性もややある。

Ⅱｅ層　黒褐色土（10YR2／2）しまり、粘性ともにややあり。径２～５ｃｍの礫が混じる。

Ⅱｆ層　褐色土（10YR4／4）しまりがややあり、粘性は弱い。径２～３㎜の砂粒を含む。

Ⅱｇ層　黒褐色土（10YR3／1）しまりは弱いが、粘性はややある。

Ⅱｈ層　黄褐色砂礫土（10YR5／6）しまりはややあり、粘性は弱い。径３～５㎝の礫が多い。

第Ⅲ層　遺物包含層と判断した。約50～70ｃｍの厚さで堆積している。次のように細分されるが、大きく見ると、Ⅲｆ層を挟んで上層と下層に分層できる。

Ⅲａ層　黒褐色土（10YR3／1）しまりは弱いが、粘性はややある。

Ⅲｂ層　黒褐色土（10YR2／3）しまりは弱く、粘性はややある。砂粒を含んでいる。

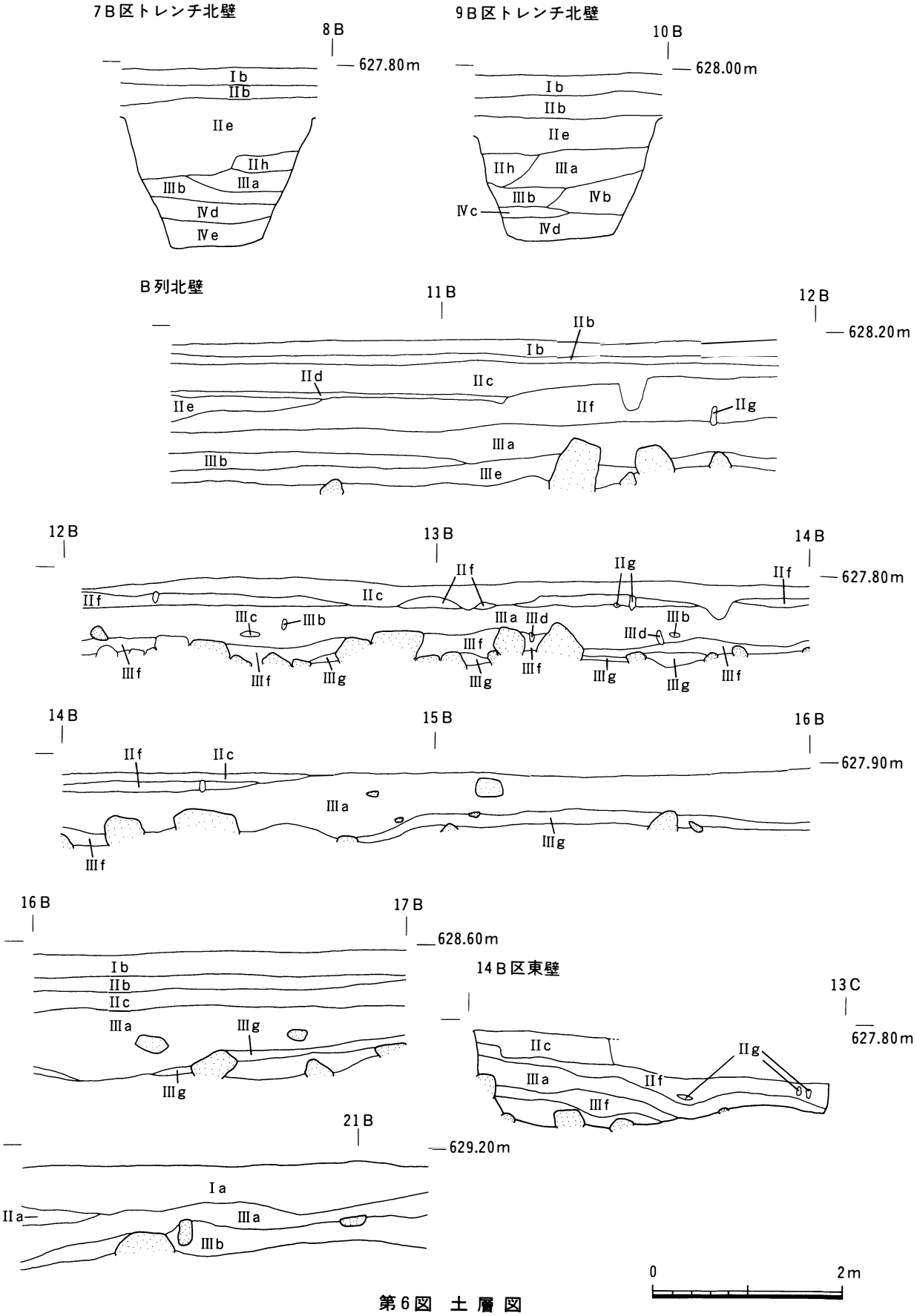
Ⅲｃ層　にぶい黄褐色土（10YR5／4）しまりは弱く、粘性も弱い。径２～４㎜の砂粒多い。

Ⅲｄ層　褐色土（7.5YR4／4）しまりは弱く、粘性はややある。

Ⅲｅ層　黒色土（10YR2／1）しまりは弱く、粘性も弱い。

Ⅲｆ層　にぶい黄褐色土（10YR4／3）しまりはやや弱く、粘性は弱い。径１～２㎜の砂粒を含む。

Ⅲｇ層　黒色土（7.5YR2／1）しまり、粘性ともにややあり。


7B区トレンチ北壁
8B
627.80m
Ib
IIb
IIe
IIh
IIIa
IIIb
IVd
IVe
9B区トレンチ北壁
10B
628.00m
Ib
IIb
IIe
IIh
IIIa
IIIb
IVb
IVc
IVd
B列北壁
11B
12B
628.20m
IIb
Ib
IId
IIc
IIe
IIf
IIg
IIIa
IIIb
IIIe
12B
13B
14B
627.80m
IIf
IIc
IIg
IIIc
IIIb
IIIa
IIId
IIIf
IIIg
14B
15B
16B
627.90m
IIf
IIc
IIIa
IIIg
IIIf
16B
17B
628.60m
Ib
IIb
IIc
IIIa
IIIg
14B区東壁
13C
627.80m
IIc
IIg
IIIa
IIf
IIIf
21B
629.20m
Ia
IIa
IIIa
IIIb
0
2m

第6図　土 層 図

第Ⅳ層　砂質および砂礫質の土が流れ込んだ土層である。遺物は確認されなかった。

Ⅳａ層　灰黄褐色砂質土（10YR4／2）しまりはややあり、粘性は弱い。

Ⅳｂ層　明黄褐色砂礫土（10YR6／6）径３～５ｃｍの砂礫が多い。

Ⅳｃ層　黒褐色土（10YR3／1）しまり、粘性ともにややあり。径１～２ｃｍの礫を少し含む。

Ⅳｄ層　にぶい黄褐色土（10YR4／3）しまり、粘性ともにややあり。径２～10ｃｍの礫を含む。

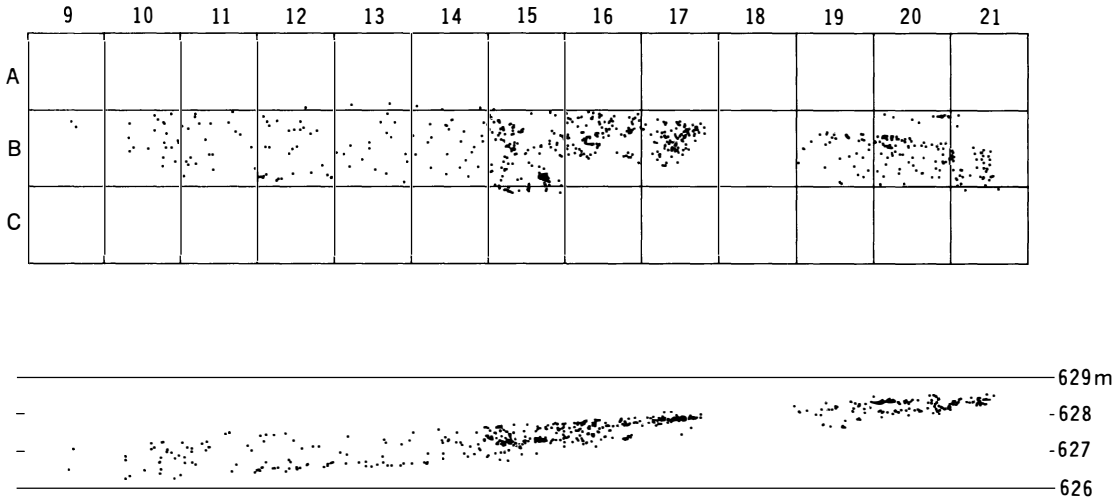
Ⅳｅ層　暗褐色土（10YR3／4）しまりがあり、粘性は弱い。径２～10cmの礫を含む。

第Ⅴ層　明黄褐色土（10YR6／6）の地山である。

第２節　遺物の概要

出土した遺物は、縄文土器および石器類が2269点である。縄文土器はほとんどが小片であるが、早期の押型文土器、後期および晩期の土器などである。押型文土器には黒鉛入りのものがある。石器類としては、下呂石の剥片が多く出土しているが、その中に混じって黒曜石もある。縄文時代においても、この地は交通の要衝であったと言える。また、製品としては、石鏃、石錐、石匙、削器、掻器、打製石斧、磨石・凹石・敲石類等が出土しているが、石鏃や打製石斧が比較的多く出土している点が注目される。

遺物の出土状況は、調査地点の東側に多く、西側に少ない。18Ｂ区のあたりは、水路が横断している地点である。東側の遺物は、縄文後晩期の土器が中心に出土した層と、早期の遺物が出土した層に２分される。また、西側は、まばらな分布を示し、流れ込んだ状況を反映している。なお、尖頭器が13Ｂ区南側の最下層で出土した。



第７図　遺物の出土状況

第３節　縄文土器

出土した縄文土器はほとんど小破片で1527点である。全体的に磨耗が激しく、比較的まとまった土器は無文の土器であり、時期が推測される有文のものは少ない。早期の黒鉛入りの土器から晩期の土器まで、時期幅は広い。後期中葉の土器が比較的多いがそれでも少量である。時期や施文方法等により、次の７群に分類して記述する。

第Ⅰ群　早期から前期初頭の土器（第８図１～21、図版５）

調査区の東側20Ｂ～21Ｂ区のあたりで押型文土器が出土し、13Ｂ区のあたりで、早期末から前期初頭と思われる土器が出土している。次の６類に分類する。

１類　黒鉛入りの土器（第８図１～４）

胎土に黒鉛を含む。磨耗が激しく表面の施文状況の観察が困難である。沢式に相当すると考えられるが、山形文が施文されているかどうか不明である。

２類　押型文（山形文）の土器（第８図５～７）

山形文が縦方向に施されている。器厚は４～５㎜である。角のある山形状を呈し、２単位で長さは12㎜、条数は不明である。１単位は6.5㎜×2.8㎜である。

３類　押型文（楕円文）の土器（第８図８～10）

楕円文が横位に施されている。器厚は約６㎜である。いわゆる穀粒状を呈し、２単位で長さ10㎜、条数は５条と思われるが、長さは15.5㎜以上である。１単位は4.2㎜×3.2㎜である。８は、帯状に施文された間に縦に沈線が施されている。

４類　その他の施文の土器（第８図11～13）

11は、格子目文が縦方向に施文されている。単位は不明である。器厚は７㎜である。12は、器厚８㎜で、磨耗が激しいが刺突列が見られる。13は器厚７㎜、刺突列が２列観察される。

５類　繊維を含む土器（第８図14～19）

無文であるが、胎土に繊維を含む土器である。条痕は観察されなかった。

６類　早期末から前期初頭にかけての土器（第８図20・21）

20・21ともに器厚４㎜と薄手である。前者は無文であるが、後者は、刺突が見られる。

第Ⅱ群　中期の土器（第８図22～29、図版５）

少量であるが第Ⅱ層から第Ⅲ層にかけて、縄文中期後半の土器が出土している。分布はまばらであ

る。施文方法により次の３類に分類する。

１類　隆帯あるいは沈線による施文の土器（第８図22～26）

22・23は波状口縁で、沈線による渦巻きが波頂部に見られる。６Ｂ区で出土している。24は、縦方向に隆帯と沈線があり、隆帯上に刺突が連続して施されている。25は、縄文地に沈線が縦位に施される。26は、隆帯が垂下していて、沈線が縦位および斜位に施される。

２類　凹線が施された土器（第８図27）

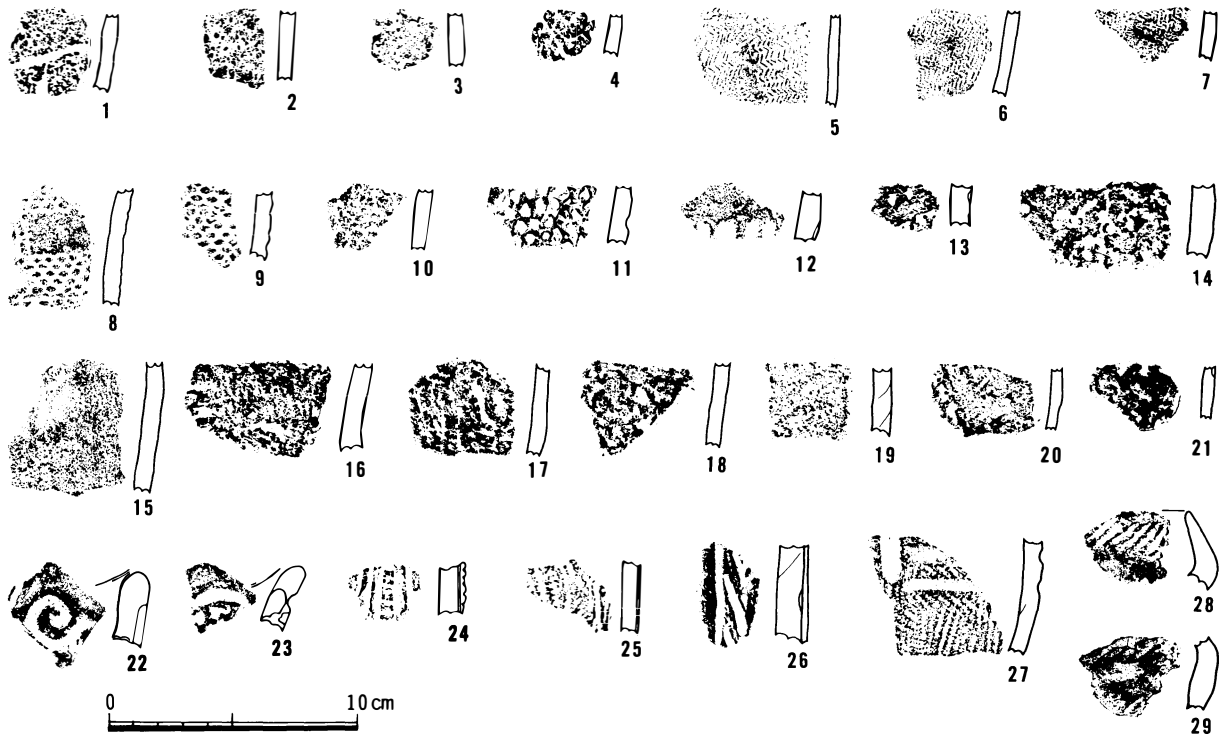
27は、縄文地に幅が広く浅い沈線（凹線）が縦位および横位に施されている。指で押さえたような施文であるが、施文の状況や胎土等から見て、後期の凹線文土器とは異なる。中期後葉に見られるものである。

３類　キャリパー形の土器（第８図28・29）

28・29は同一個体である。キャリパー形で内湾する土器で、口縁部に無節の縄文が施されている。いわゆる東海系の土器であろう。10Ｂ区で出土している。

第Ⅲ群　後期の土器（第９図、図版５）

有文の土器が少量であるが出土している。前葉から後葉にかけての各時期のものがある。中葉の羽状沈線を施したものが比較的まとまっている。



第８図　縄文土器(1)第Ⅰ・Ⅱ群

１類　前葉の土器（第９図30・31）

30は、くの字状に屈曲する口縁部で、口縁端部に沈線が縦横に施されている。31は、縄文地に刻みの入った微隆起線が横走する。

２類　中葉の土器（第９図32～41）

羽状沈線を施すもの（32～36）と、沈線が横走するもの（37～40）がある。32は外反する口縁で、端部に連続刻みが入る。33～35は羽状沈線文が施された胴部片である。36は、同一個体と思われる破片を並べたものである。口縁部にＲＬの縄文が施され、頸部に羽状沈線が施されると推定される。胴下半部は無文である。32～36はいずれも16Ｂ区で出土している。

37は波状口縁で、ＲＬの縄文地に沈線が口縁に沿って３本、頸部に２本横走し、口縁内面に縄文が施される。38～40は、胴部片であるが、沈線が２本横走する。38・39はともにＲＬの縄文が施文されている。40は無文で、沈線は深い。

41は、くの字に内屈する器形で、屈曲部に沈線が横走し縄文が施されている。口縁部および胴部は無文である。元住吉山Ⅰ式段階のものと考えられる。

３類　後葉の土器（第９図42・43）

凹線文の土器である。15Ｂ区から15Ｃ区にかけて出土している。42は外反する器形で、縄文地に５本の凹線が横位に引かれている。43は、同一個体と思われる破片を集めたものであるが、やはり外反する器形で、縄文地に凹線が２本引かれている。

第Ⅳ群　晩期の土器（第10図、図版６）

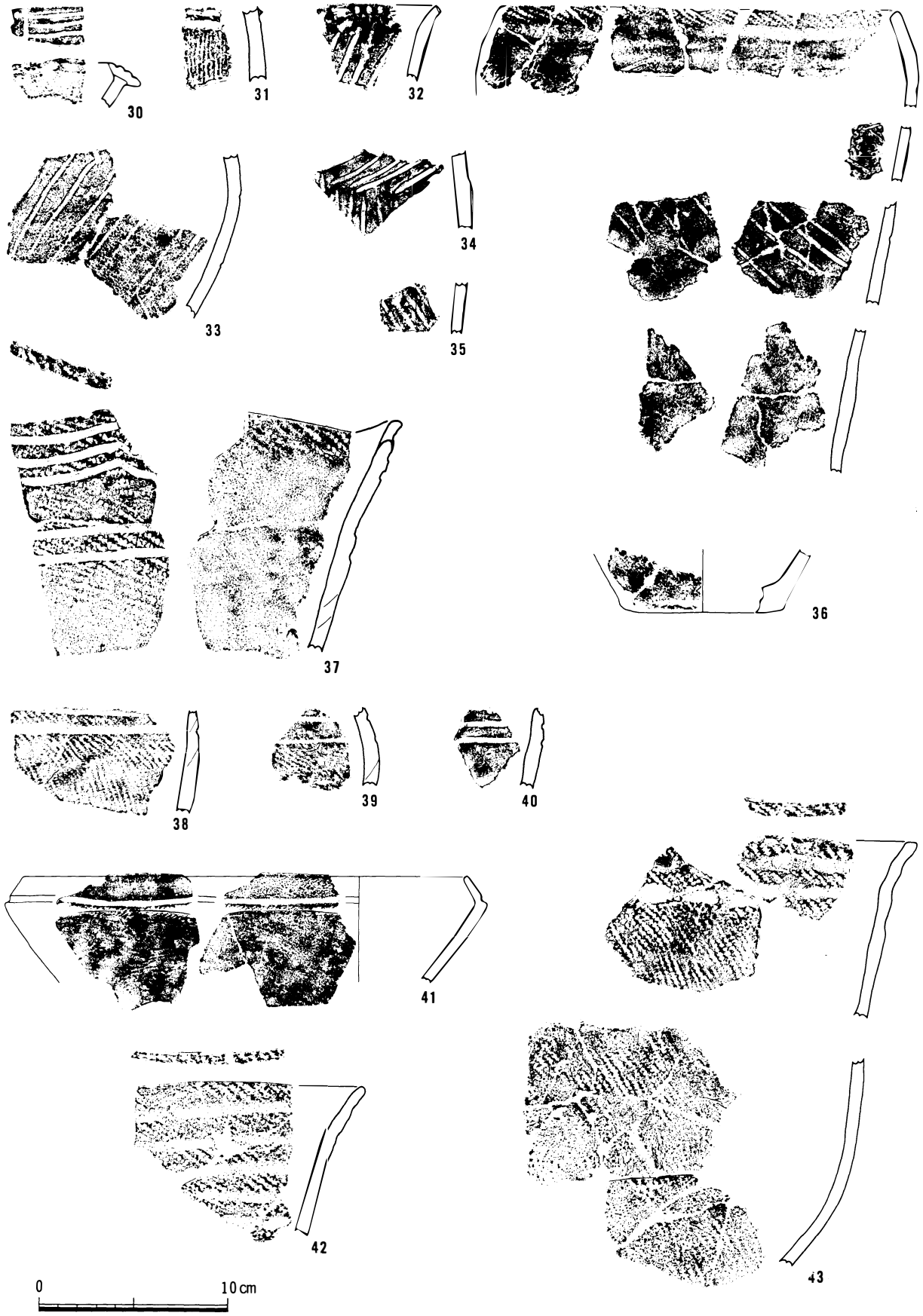
時期が特定できないが、晩期の土器が少量出土している。主に15Ｂ区から17Ｂ区にかけて分布している。前半と後半の２類に分類して記述する。

１類　前半の土器（第10図44～56）

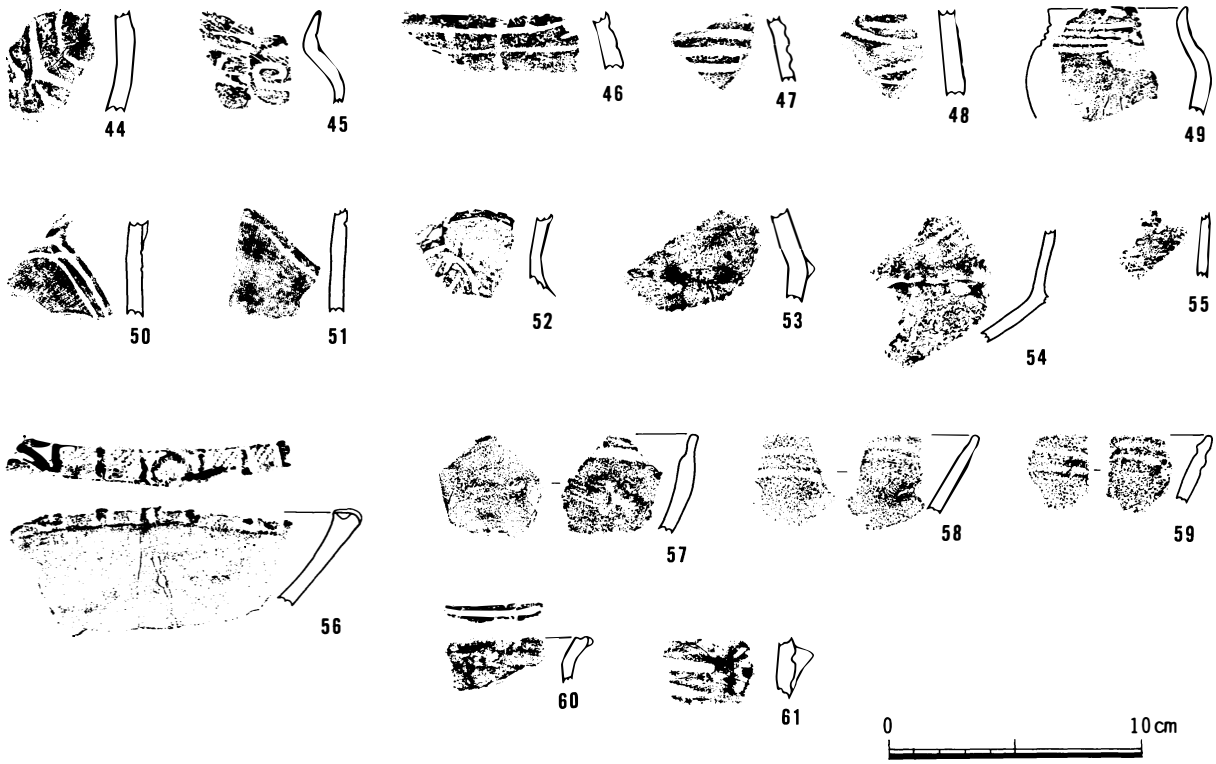
44は三叉文が見られる。45は、屈曲する頸部で、縄文地に入り組み風の文様が見られる。46～49は、横方向に沈線が施されている。49は、推定であるが、口径5.5㎝の小型の鉢形土器である。口縁部に沈線が４本施されている。50～52は同一個体である。沈線が曲線的に施されている。53は、内屈する器形で、瘤状の突起がある。54・55は同一個体である。器厚が４～５㎜と薄い。54は、わずかに隆帯を有する屈曲部があり、上方に縄文が施文されている。55は、浅い沈線が引かれ、赤彩されている。10Ｂ区で出土している。56は浅鉢形土器である。口縁端部に縄文を施し、隆帯が貼りつけてある。

２類　後半の土器（第10図57～61）

57はやや開き気味の口縁で、内面に沈線が１本横走する。58・59は同一個体である。直線的にやや開く口縁部で、内面に沈線が２本横走する。12Ｂ区で出土している。60は、外反する器形で口縁端部に沈線が施されている。20Ｂ区で出土している。61はいわゆる浮線状の文様が施され、突起がある。



第9図　縄文土器(2)第III群



第10図　縄文土器(3)第Ⅳ群

第Ⅴ群　縄文の土器（第11図62～91、図版６）

時期の特定は困難であるが、器厚、胎土等から見て、62～70は縄文中期、72～91は縄文後晩期と推定した。71は直立する口縁部で器厚が５㎜と薄い。撚糸文が施されている。

第Ⅵ群　条痕文の土器（第11図92～105、図版６）

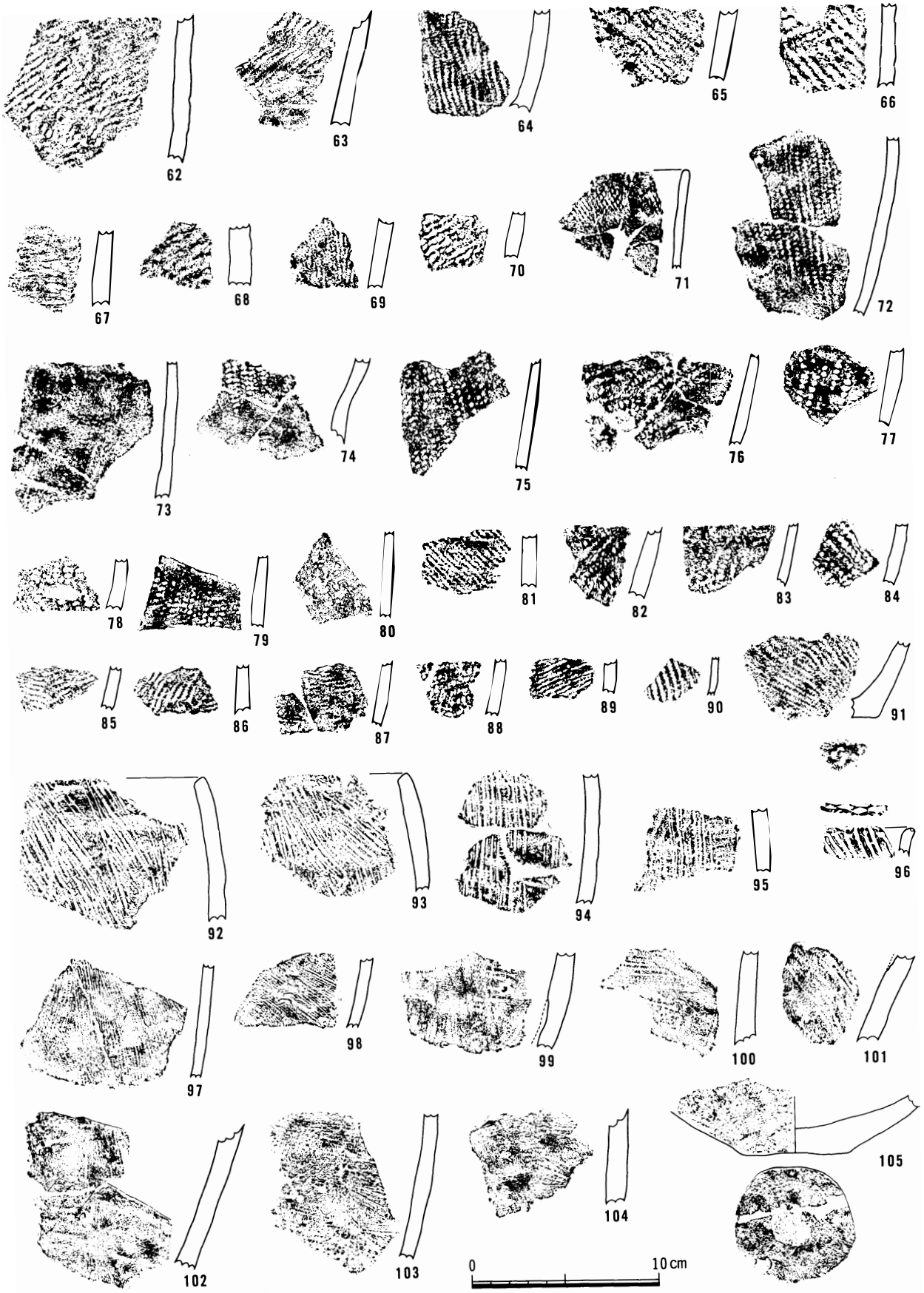
92～95は同一個体である。直線的にやや内傾する口縁で、はっきりした条痕が斜位または縦位に施されている。96は、わずかに外反する口縁で、斜位に条痕が施されている。口縁端部に刺突が見られる。97・98は、目が細かく細密条痕と考えられる。99～105は、わずかに条痕調整が観察される。105の底部は、なで調整である。底部から立ち上がる角度が大きく、浅鉢と推定される。

第Ⅶ群　無文の土器（第12図、図版７）

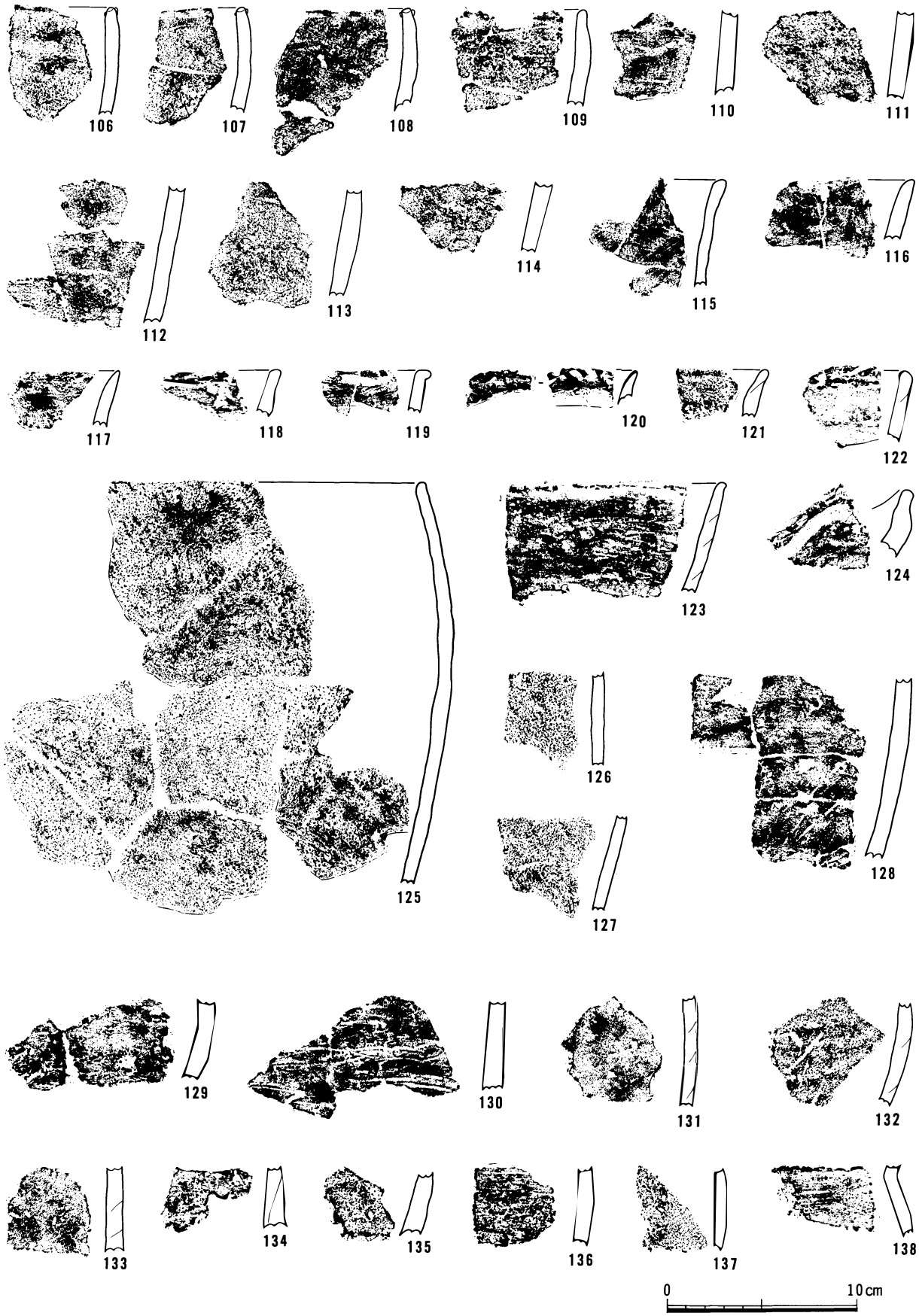
時期の特定は困難であるが、器厚、胎土から見て、106～114は縄文中期、115～138は縄文後晩期と推定した。

106～108は同一個体である。やや内湾気味に立ち上がる口縁で、端部に指押さえが見られる。109は直立する口縁である。110～114は器形不明の胴部片である。

115～123は外傾する口縁である。120・122は、口縁端部内面に刻みが見られる。124は波状を呈する。125は内湾する口縁であり、126・127と同一個体である。128～137は器形不明の胴部片である。138は頸部のくびれ部と推定される。



第11図　縄文土器(4)第Ⅴ・Ⅵ群



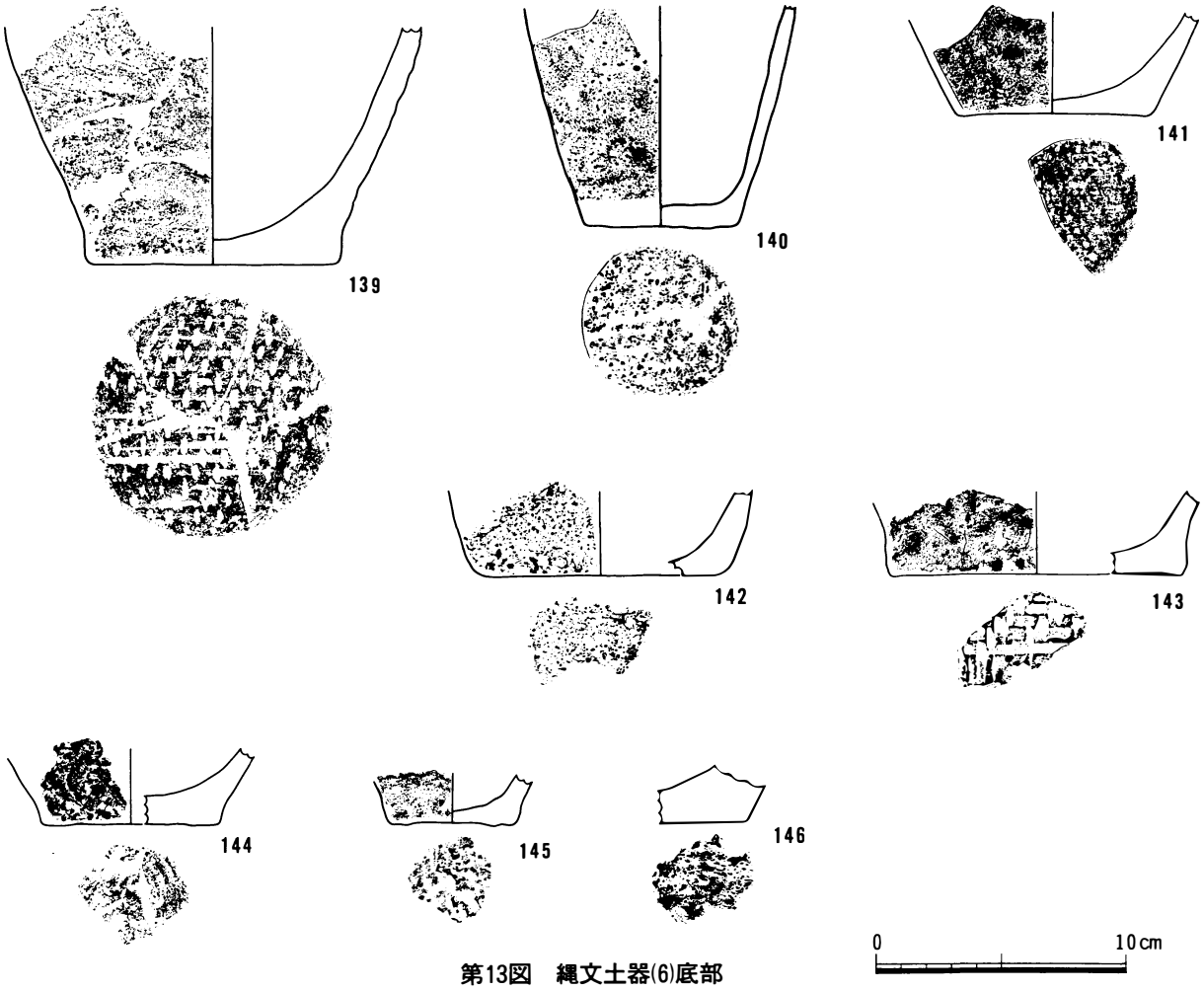
第12図　縄文土器(5)第Ⅶ群

底部（第13図、図版７）

底部は12点出土している。時期の特定が困難であるが、出土状況や胎土・施文等から見て、ほとんどが後期から晩期にかけてのものであろう。

器形は、底部からくびれを持たず立ち上がるもの４点（141・142・145）、底部から垂直に立ち上がってから胴部に至るもの７点（139・140・143・144）、不明１点（146）である。底部から胴部への立ち上がりの角度は、110度以下の胴部に膨らみを持たない深鉢３点（140・142）、120度以下の胴部が膨らむ深鉢４点（139・141・144）、140度以下の鉢形土器あるいは胴下半部が大きく膨らむ深鉢１点、140度以上の浅鉢や皿形土器１点、不明３点（145・146）である。

底部の圧痕に関しては、網代圧痕が９点、ナデが１点、不明２点である。網代圧痕は、「１本越え１本潜り１本送り」１点（140）、「２本越え２本潜り１本送り」１点（143）、「２本越え１本潜り１本送り」３点（139・141）、不明４点（144～146）である。



第13図　縄文土器(6)底部

土器観察表の記号について

観察項目の記号は次の通りである。

〔器形〕Ａは深鉢形土器、Ｂは浅鉢形土器、Ｃは小型の鉢形土器。

〔焼成〕ａ～ｅの５段階で示す。硬くしまった土器をａとする。

〔胎土〕砂粒の含有量をａ～ｅの５段階で示す。30％以上の多量の場合をａとする。

第2表　縄文土器観察表

番号	地区	層	器種	文様・調整	焼成	胎土	色調（表面・裏面）	
1	20B	Ⅲ	A	無文	b	c 黒鉛	10YR6／6 明黄褐色	10YR5／3 にぶい黄褐色
2	21B	Ⅲ	A	無文	b	c 黒鉛	10YR6／6 明黄褐色	10YR5／3 にぶい黄褐色
3	20B	Ⅲ	A	無文	b	c 黒鉛	10YR6／6 明黄褐色	10YR5／3 にぶい黄褐色
4	21B	Ⅲ	A	無文	b	c 黒鉛	10YR6／6 明黄褐色	10YR5／3 にぶい黄褐色
5	21B	Ⅲ	A	押型文(山形文)	a	d	7.5YR6／6 橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
6	20B	Ⅲ	A	押型文(山形文)	a	d	7.5YR6／6 橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
7	20B	Ⅲ	A	押型文(山形文)	a	d	7.5YR6／6 橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
8	21B	Ⅲ	A	押型文(楕円文)	b	c	10YR4／2 灰黄褐色	7.5YR6／6 橙色
9	21B	Ⅲ	A	押型文(楕円文)	b	c	7.5YR5／4 にぶい褐色	7.5YR5／4 にぶい褐色
10	20B	Ⅲ	A	押型文(楕円文)	b	c	7.5YR5／4 にぶい褐色	7.5YR6／6 橙色
11	15B	Ⅲ	A	押型文(格子目文)	b	d	2.5Y6／2 灰黄色	10YR5／2 灰黄褐色
12	16B	Ⅲ	A	刺突	c	c	10YR6／4 にぶい灰橙色	10YR5／4 にぶい黄橙色
13	13B	Ⅲ	A	刺突	c	d	10YR5／2 灰黄褐色	10YR5／2 灰黄褐色
14	19B	Ⅲ	A	無文	c	b 繊維	7.5YR5／6 明褐色	10YR7／6 明黄褐色
15	11B	Ⅲ	A	無文	a	c 繊維	7.5YR6／6 橙色	7.5YR4／4 褐色
16	20B	Ⅲ	A	無文	b	b 繊維	7.5YR6／6 橙色	2.5Y4／2 暗灰黄色
17	21B	Ⅲ	A	無文	b	c 繊維	10YR6／3 にぶい黄橙色	10YR5／3 にぶい黄褐色
18	20B	Ⅲ	A	無文	b	c 繊維	10YR6／3 にぶい黄橙色	10YR5／3 にぶい黄褐色
19	21B	Ⅲ	A	無文	c	c 繊維	7.5YR5／4 にぶい褐色	7.5YR5／6 明褐色
20	13B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR4／2 灰黄褐色	10YR4／2 灰黄褐色
21	13B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR4／2 灰黄褐色	10YR4／2 灰黄褐色
22	16B	Ⅲ	A	沈線	b	c	5YR6／6 橙色	5YR7／6 橙色
23	16B	Ⅲ	A	沈線	b	d	7.5YR7／6 橙色	7.5YR7／6 橙色
24	10B	Ⅲ	A	隆帯・沈線	d	b	7.5YR4／3 褐色	7.5YR4／3 褐色
25	14B	Ⅲ	A	沈線・縄文	b	c	5YR6／6 橙色	10YR7／4 にぶい黄橙色
26	15A	Ⅲ	A	隆帯・沈線	c	e	10YR7／6 明黄褐色	7.5YR6／4 にぶい橙色
27	21B	Ⅱ	A	凹線・縄文	b	c	7.5YR5／4 にぶい褐色	7.5YR4／2 灰褐色
28	20B	Ⅱ	A	縄文	c	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	10YR8／4 浅黄橙色
29	20B	Ⅱ	A	縄文	c	c	10YR4／2 灰黄褐色	10YR7／4 にぶい黄橙色
30	12B	Ⅲ	A	沈線	c	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	10YR7／3 にぶい黄橙色
31	15C	Ⅲ	A	沈線・縄文	c	b	7.5YR6／6 橙色	10YR5／3 にぶい黄褐色
32	16B	Ⅲ	A	沈線・刺突	b	c	10YR4／2 灰黄褐色	10YR4／2 灰黄褐色
33	16B	Ⅲ	A	沈線	c	c	10YR4／2 灰黄褐色	10YR3／2 黒褐色
34	16B	Ⅲ	A	沈線	b	d	7.5YR7／4 にぶい橙色	7.5YR6／6 橙色
35	16B	Ⅲ	A	沈線	b	c	10YR4／2 灰黄褐色	5YR6／6 橙色
36	16B	Ⅲ	A	沈線・縄文	c	c	7.5YR7／6 橙色	10YR7／4 にぶい黄橙色
37	20B	Ⅲ	A	沈線・縄文	c	b	10YR7／4 にぶい黄橙色	10YR7／6 明黄褐色
38	15C	Ⅲ	A	沈線・縄文	c	b	10YR7／4 にぶい黄橙色	10YR7／4 にぶい黄橙色
39	16B	Ⅱ	A	沈線・縄文	c	c	7.5YR7／4 にぶい橙色	2.5Y7／4 浅黄色
40	13B	Ⅲ	A	沈線	c	b	10YR7／2 にぶい黄橙色	2.5Y7／2 灰黄色
41	16B	Ⅲ	A	沈線・縄文	a	d	2.5Y5／2 暗灰黄色	2.5Y5／2 暗灰黄色
42	15B	Ⅲ	A	凹線・縄文	b	b	10YR6／4 にぶい黄橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
43	15B	Ⅲ	A	凹線・縄文	c	c	7.5YR5／2 灰褐色	7.5YR5／2 灰褐色
44	16B	Ⅲ	A	沈線・縄文	b	c	2.5Y5／1 黄灰色	10YR5／2 灰黄褐色
45	15B	Ⅲ	A	沈線・縄文	b	d	10YR5／3 にぶい黄褐色	2.5Y5／2 暗灰黄色
46	16B	Ⅲ	A	沈線	b	c	5YR6／6 橙色	2.5Y7／4 浅黄色
47	15B	Ⅲ	A	沈線	b	c	2.5Y6／3 にぶい黄色	2.5Y6／3 にぶい黄色
48	15B	Ⅲ	A	沈線	c	b	10YR6／2 灰黄褐色	10YR6／3 にぶい黄橙色
49	16B	Ⅲ	C	沈線	b	c	7.5YR7／6 橙色	10YR7／4 にぶい黄橙色
50	15B	Ⅲ	A	沈線・縄文	b	c	10YR6／4 にぶい黄橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色

番号	地区	層	器種	文様・調整	焼成	胎　土	色　　調　（表面・裏面）	
51	15B	Ⅲ	A	沈線	b	c	10YR6／4 にぶい黄橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
52	15B	Ⅲ	A	沈線・縄文	b	c	10YR6／4 にぶい黄橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
53	17B	Ⅲ	A	隆帯	c	b	2.5Y6／3 にぶい黄色	10YR6／4 にぶい黄橙色
54	10B	Ⅲ	A	縄文	b	d	7.5YR7／4 にぶい橙色	7.5YR7／6 橙色
55	10B	Ⅲ	A	沈線・赤色顔料	b	d	7.5YR7／4 にぶい橙色	7.5YR7／6 橙色
56	15B	Ⅲ	B	隆帯・縄文	a	c	10YR6／4 にぶい黄橙色	7.5YR6／6 橙色
57	17B	Ⅲ	A	内面に沈線	b	d	7.5YR6／6 橙色	10YR7／4 にぶい黄橙色
58	12B	Ⅲ	A	内面に沈線	b	c	2.5Y7／4 浅黄色	2.5Y7／4 浅黄色
59	12B	Ⅲ	A	内面に沈線	b	c	2.5Y7／4 浅黄色	2.5Y7／4 浅黄色
60	20B	Ⅲ	A	沈線	b	c	10YR6／4 にぶい黄橙色	7.5YR6／4 にぶい橙色
61	16B	Ⅲ	A	隆帯・沈線	b	b	7.5YR6／3 にぶい橙色	10YR7／3 にぶい黄橙色
62	21B	Ⅲ	A	縄文	c	b	10YR3／2 黒褐色	7.5YR4／6 褐色
63	20B	Ⅱ	A	縄文	c	c	2.5YR7／3 浅黄色	2.5Y8／3 浅黄色
64	20B	Ⅲ	A	縄文	b	c	10YR7／6 明黄褐色	10YR6／4 にぶい黄橙色
65	13B	Ⅲ	A	縄文	b	c	7.5YR6／6 橙色	7.5YR6／6 橙色
66	20B	Ⅲ	A	縄文	b	c	10YR3／3 暗褐色	7.5YR3／3 暗褐色
67	20B	Ⅱ	A	縄文	c	c	2.5YR7／3 浅黄色	2.5Y8／3 浅黄色
68	10B	Ⅲ	A	縄文	c	c	7.5YR6／4 にぶい橙色	10YR6／3 にぶい黄橙色
69	15C	Ⅲ	A	縄文	c	b	10YR5／6 黄褐色	10YR5／3 にぶい黄褐色
70	21B	Ⅲ	A	縄文	c	c	5YR5／6 明赤褐色	10YR2／1 黒色
71	20B	Ⅲ	A	縄文	b	d	10YR7／3 にぶい黄橙色	10YR7／4 にぶい黄橙色
72	16B	Ⅲ	A	縄文	b	c	10YR8／4 浅黄橙色	10YR7／4 にぶい黄橙色
73	16B	Ⅲ	A	縄文	b	b	2.5Y7／3 浅黄色	2.5Y7／3 浅黄色
74	10B	Ⅲ	A	縄文	a	b	2.5Y7／3 浅黄色	2.5Y7／2 灰黄色
75	15C	Ⅲ	A	縄文	b	b	2.5Y6／1 黄灰色	10YR5／3 にぶい黄褐色
76	16B	Ⅲ	A	縄文	c	c	7.5YR7／6 橙色	2.5Y7／2 灰黄色
77	12B	Ⅲ	A	縄文	b	c	10YR5／3 にぶい黄褐色	10YR5／4 にぶい黄褐色
78	12B	Ⅲ	A	縄文	b	c	10YR5／3 にぶい黄褐色	10YR5／4 にぶい黄褐色
79	16B	Ⅲ	A	縄文	b	b	2.5Y7／2 灰黄色	10YR4／2 灰黄褐色
80	14B	Ⅲ	A	縄文	b	b	2.5Y6／1 黄灰色	10YR5／3 にぶい黄褐色
81	15B	Ⅲ	A	縄文	c	c	2.5Y5／2 暗灰黄色	5Y3／1 オリーブ黒色
82	15B	Ⅲ	A	縄文	c	c	7.5YR7／6 橙色	2.5Y7／2 灰黄色
83	16B	Ⅲ	A	縄文	c	c	7.5YR7／6 橙色	2.5Y7／2 灰黄色
84	15A	Ⅲ	A	縄文	c	b	7.5YR6／4 にぶい橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
85	15B	Ⅲ	A	縄文	b	c	5YR4／6 赤褐色	N2／ 黒色
86	15C	Ⅲ	A	縄文	b	c	5YR4／6 赤褐色	N2／ 黒色
87	15A	Ⅱ	A	縄文	c	c	7.5YR5／3 にぶい褐色	7.5YR5／3 にぶい褐色
88	16B	Ⅲ	A	縄文	c	c	7.5YR7／6 橙色	2.5Y7／2 灰黄色
89	15B	Ⅲ	A	縄文	c	c	10YR6／3 にぶい黄橙色	10YR6／2 灰黄褐色
90	12B	Ⅲ	A	縄文	c	c	10YR3／2 黒褐色	10YR5／3 にぶい黄褐色
91	16B	Ⅲ	A	縄文	c	b	2.5Y7／2 灰黄色	2.5Y7／2 灰黄色
92	16B	Ⅲ	A	条痕	c	b	5YR5／6 明赤褐色	10YR6／4 にぶい黄橙色
93	16B	Ⅲ	A	条痕	c	b	5YR5／6 明赤褐色	10YR6／4 にぶい黄橙色
94	16B	Ⅲ	A	条痕	c	b	5YR5／6 明赤褐色	10YR6／4 にぶい黄橙色
95	16B	Ⅲ	A	条痕	c	b	5YR5／6 明赤褐色	10YR6／4 にぶい黄橙色
96	15B	Ⅰ	A	条痕	a	c	10YR5／3 にぶい黄褐色	10YR5／3 にぶい黄褐色
97	15B	Ⅱ	A	条痕	a	c	10YR3／2 黒褐色	10YR5／2 灰黄褐色
98	15C	Ⅱ	A	条痕	a	c	10YR3／2 黒褐色	10YR5／2 灰黄褐色
99	20B	Ⅲ	A	条痕	b	c	7.5YR8／6 浅黄橙色	10YR8／4 浅黄橙色
100	20B	Ⅲ	A	条痕	b	c	7.5YR8／6 浅黄橙色	10YR8／4 浅黄橙色

番号	地区	層	器種	文様・調整	焼成	胎　土	色　調（表面・裏面）	
101	20B	Ⅲ	A	条痕	b	c	7.5YR8／6 浅黄橙色	10YR8／4 浅黄橙色
102	20B	Ⅲ	A	条痕	b	c	7.5YR8／6 浅黄橙色	10YR8／4 浅黄橙色
103	20B	Ⅲ	A	条痕	c	c	7.5YR8／6 浅黄橙色	10YR8／4 浅黄橙色
104	20B	Ⅲ	A	条痕	b	c	7.5YR8／6 浅黄橙色	10YR8／4 浅黄橙色
105	16B	Ⅲ	B	条痕	c	a	10YR6／4 にぶい黄橙色	7.5YR6／6 橙色
106	17B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
107	17B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
108	17B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
109	17B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
110	17B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
111	16B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
112	17B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
113	17B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
114	16B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR5／6 明褐色	7.5YR5／6 明褐色
115	17B	Ⅲ	A	無文	a	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	7.5YR7／6 橙色
116	17B	Ⅲ	A	無文	a	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	7.5YR7／6 橙色
117	17B	Ⅲ	A	無文	a	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	7.5YR7／6 橙色
118	17B	Ⅲ	A	無文	a	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	7.5YR7／6 橙色
119	17B	Ⅲ	A	無文	a	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	7.5YR7／6 橙色
120	15C	Ⅱ	A	無文	a	c	7.5YR4／1 褐灰色	10YR5／1 褐灰色
121	20B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR7／4 にぶい黄橙色	2.5Y6／2 灰黄色
122	20B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR7／6 橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
123	19B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR6／6 明黄褐色	7.5YR7／6 橙色
124	15B	Ⅲ	A	無文	c	b	5YR6／6 橙色	10YR8／3 浅黄橙色
125	15B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR4／4 褐色	10YR6／6 明黄褐色
126	15B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR4／4 褐色	10YR6／6 明黄褐色
127	15B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR4／4 褐色	10YR6／6 明黄褐色
128	17B	Ⅲ	A	無文	a	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	7.5YR7／6 橙色
129	16B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR4／2 灰黄褐色	7.5YR6／6 橙色
130	17B	Ⅲ	A	無文	a	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	7.5YR7／6 橙色
131	16B	Ⅲ	A	無文	b	c	7.5YR6／6 橙色	7.5YR5／4 にぶい褐色
132	16B	Ⅱ	A	無文	c	c	10YR5／3 にぶい黄褐色	10YR4／2 灰黄褐色
133	20B	Ⅲ	A	無文	b	c	2.5Y6／3 にぶい黄色	2.5Y6／3 にぶい黄色
134	15B	Ⅲ	A	無文	b	c	5YR4／2 灰褐色	2.5Y3／1 黒褐色
135	21B	Ⅲ	A	無文	c	c	10YR7／3 にぶい黄橙色	10YR8／2 灰白色
136	20B	Ⅱ	A	無文	b	c	10YR6／4 にぶい黄橙色	10YR6／3 にぶい黄橙色
137	11B	Ⅱ	A	無文	b	c	7.5YR6／6 橙色	7.5YR6／6 橙色
138	20B	Ⅱ	A	無文	b	d	10YR6／4 にぶい黄橙色	10YR6／6 明黄褐色
139	17B	Ⅲ	A	無文	c	b	7.5YR6／6 橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
140	15B	Ⅱ	A	無文	b	b	2.5Y6／3 にぶい黄色	2.5Y7／4 浅黄色
141	15B	Ⅲ	A	無文	c	c	7.5YR6／6 橙色	10YR5／4 にぶい黄褐色
142	16B	Ⅲ	A	無文	b	b	2.5Y7／4 浅黄色	2.5Y7／4 浅黄色
143	14B	Ⅲ	A	無文	b	c	2.5Y6／2 灰黄色	2.5Y7／2 灰黄色
144	19B	Ⅲ	A	無文	b	c	10YR6／4 にぶい黄橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色
145	14A	Ⅱ	A	無文	b	d	7.5YR5／4 にぶい褐色	10YR4／2 灰黄褐色
146	19B	Ⅲ	A	無文	b	c	7.5YR6／6 橙色	10YR6／4 にぶい黄橙色

第４節　石 器 類

出土した石器類の総数は742点である。第Ⅱ層と判断した層からの出土のものもあるが、ほとんどが第Ⅲ層からの出土である。遺構が確認できなかったので、一括して器種ごとに記述する。

石鏃（第14図１～26、図版８）

総数は41点である。石材は、下呂石37点（90.2%）、チャート２点（4.9%）、黒曜石２点（4.9%）である。他の器種と同様に下呂石製が圧倒的に多い。

形態に関しては、尖頭部と基部との組み合わせで分類した[1)]。

尖頭部の分類

１類　鋭角な尖頭部を持つもの。

２類　１類と同じく鋭角な尖頭部を持つが、全体が細長いもの（全長が全幅の２倍以上）。

３類　鈍角な尖頭部を持つもの。

４類　先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状を持つもの。

５類　先端が尖らず、丸いカーブを描くもの。

６類　先端が小さく尖り出しているもの。

基部の分類

Ａ類　基部の中央部がＵ字型に深くえぐられているもの。

Ｂ類　基部の凹状のえぐりが浅く不明瞭なもの。

Ｃ類　基部が凹状のもの。

Ｄ類　いわゆる平基鏃で、基部が直線状になるもの。

Ｅ類　いわゆる円基鏃で、基部が丸みを帯びて突出したもの。

Ｆ類　いわゆる有茎鏃で、基部に茎を持つもの。

Ｇ類　いわゆる片足鏃で、基部に片方しか脚部を持たないもの。もしくは、一方の脚部が非常に小さいもの。

破損、折損の部位による分類

ａ　尖頭部欠損

ｂ　一方の脚部または基部の一部欠損

ｃ　脚部のみ残存

ｄ　尖頭部のみ残存

ｅ　尖頭部と一方の脚部欠損

ｆ　基部から胴部の半身欠損

ｇ　両脚を欠損

ｈ　基部を欠損（胴部と尖頭部が残存）
ｉ　胴部のみ（基部と尖頭部を欠く）

以上の分類によると、１Ａ類１点、１Ｂ類７点、１Ｃ類８点、１Ｄ類３点、１Ｆ類２点、２Ｂ類１点、不明19点である。

１は１Ａ類であるが、縄文早期に見られるタイプのものである。また、９もやや肩が張った器形をしており、同様の時期の可能性がある。８・24・25は、いずれも偏平な剥片を利用し、比較的荒い剥離面を有するタイプで類似している。１Ｆ類は後晩期のものと推定されるので、25の基部の形態から見て、８や24のようなものも同様の時期のものと考えられる。さらに、晩期に特徴的な４類が見あたらないことと、後期中葉から後葉の土器が比較的多く出土していることから、これらのものは後期の可能性が高い。

石錐（第14図27～30、図版８）

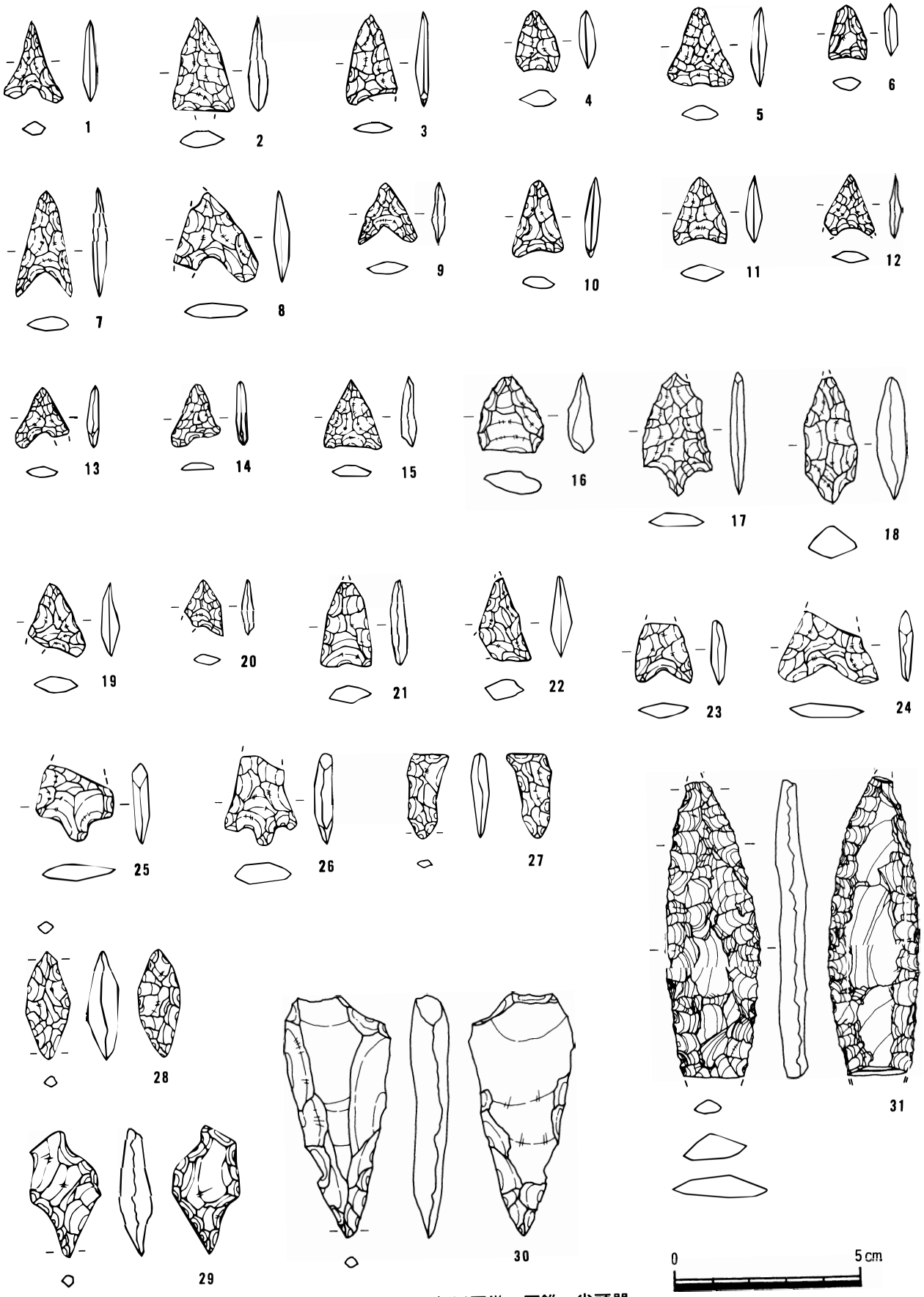
５点出土している。下呂石３点、チャート２点である。形態分類は以下のようである。

１類　全体の形状が棒状をなすもの。
　１Ａ類　両端が尖るもの。
　１Ｂ類　錐部は一端のみに作られ、他端は鈍頭をなすもの（全面に調整加工を施されるものを原則とする）。
２類　剥片の一端に長い錐部を作り出し、明瞭なつまみ状の頭部を持つもの。
３類　明瞭なつまみ状の頭部を持つもので、錐部が著しく短いもの。
４類　錐部が次第に広がっていき頭部との区分が不明瞭なもの。
　４Ａ類　両面もしくは片面の全体が調整加工を施されているもの。
　４Ｂ類　錐部の両側縁に調整加工の施されるもので、素材の剥片の形状を留めるもの。
５類　棒状あるいは長い三角形状の剥片の先端に微弱な調整加工を加え、そのまま錐として用いたもの。

以上の分類によると、１Ａ類１点、４Ｂ類２点、不明２点である。

尖頭器（第14図31、図版８）

13Ｂ区南側の最下層で出土した。石材は珪質頁岩製であろう。両面調整で、裏面は先行剥離面を残し、深形細部調整をしている。表面は中心部にまで調整が及んでいる。先端部整形と器形整形の剥離の相違ははっきりしない。形態は木葉形であるが、いわゆる柳葉形とも言える。飛騨地方の尖頭器に関しては、吉朝則富氏が大形および中形の尖頭器について集成を行っている（吉朝1995）。それによると28点の出土例がある。本製品は中形のものであるが、集成の中には類似したものがほとんど見あたらない。



第14図　石器類(1)石鏃・石錐・尖頭器

石匙（第15図32～35、図版８）

５点出土している。下呂石４点、チャート１点である。いずれもいわゆる横型のものである。32はつまみ部が中央部に位置する。赤色のチャートである。29の石錐が同様の石である。33はつまみ部のえぐりが弱く、腹面に剥離痕が見られる。35はえぐり部がやや不明瞭で、剥離痕も部分的にしか見あたらないが、全体的な形状から見て石匙と判断した。

削器（第15図36～41、図版８）

剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出した石器を削器とした。刃部の作出方法により次のように分類する。

１類　片面加工により刃部を作出したもの。
２類　片面加工により作出された刃部と、両面加工により作出された刃部を合わせ持つもの。
３類　両面加工により刃部を作出したもの。

下呂石７点、チャート１点の計８点出土している。１類７点、３類１点であり、２類は見あたらなかった。

掻器（第16図42～46、図版８）

急角度に調整された刃部を持つ石器を掻器とした。刃部の位置と数により次のように分類する。

１類　素材の全周が刃部となるいわゆるラウンドスクレイパー。
２類　素材の一辺縁を除く三辺縁が刃部となるもの。
３類　縦長剥片が用いられ、その側縁と末端が刃部となるもの。
４類　素材の長軸先端部に刃部を作り出したもの。

下呂石５点、チャート２点の計７点出土している。２類４点、４類３点であり、１類および３類は見あたらなかった。

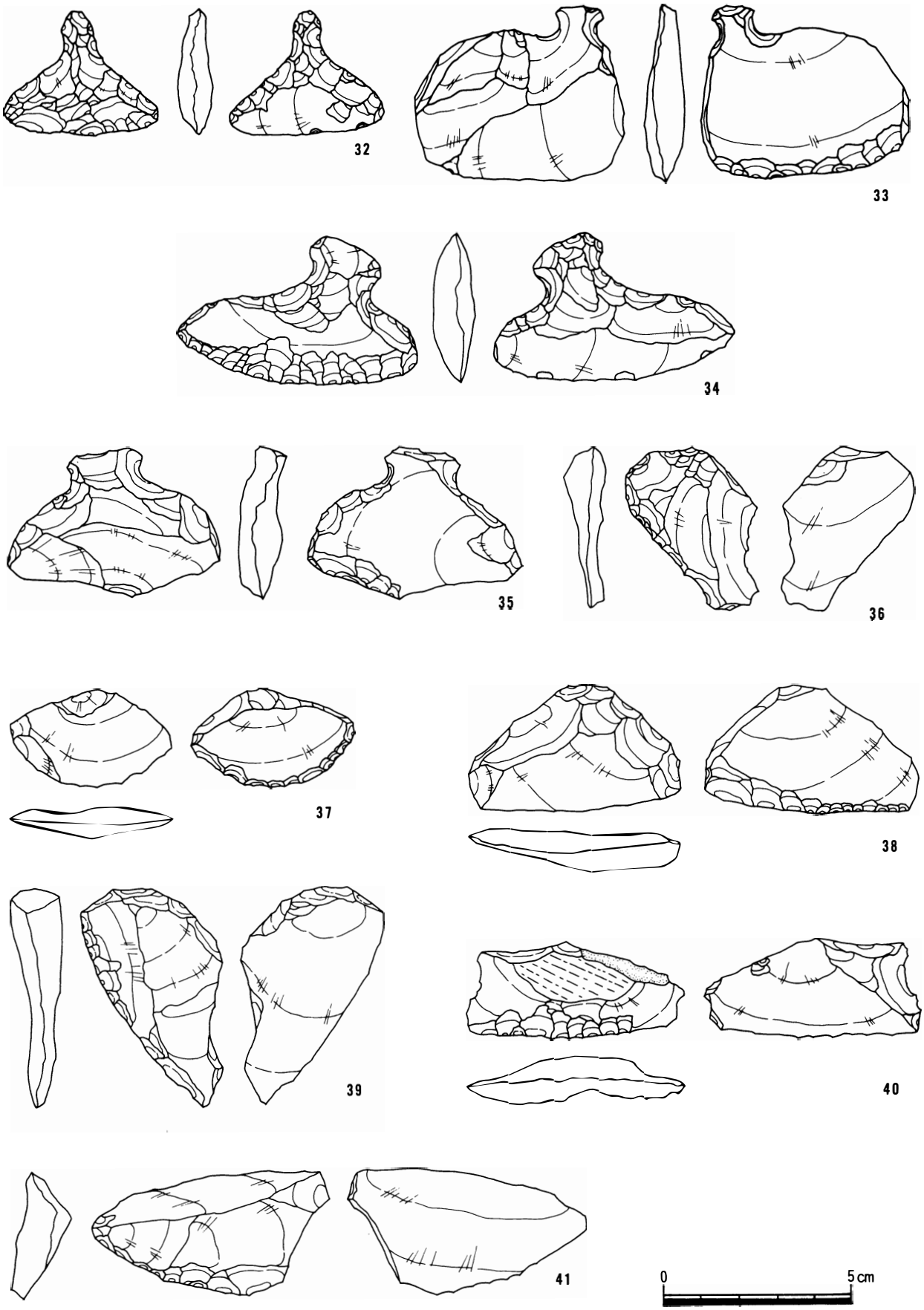
両極剥離痕のある石器（第16図47～49、図版９）

向かい合った二辺ないし四辺の辺縁部に剥離痕やつぶれが認められる石器。大部分がピエス・エスキーユと考えられるが、機能的に異なるものが含まれると推定される。

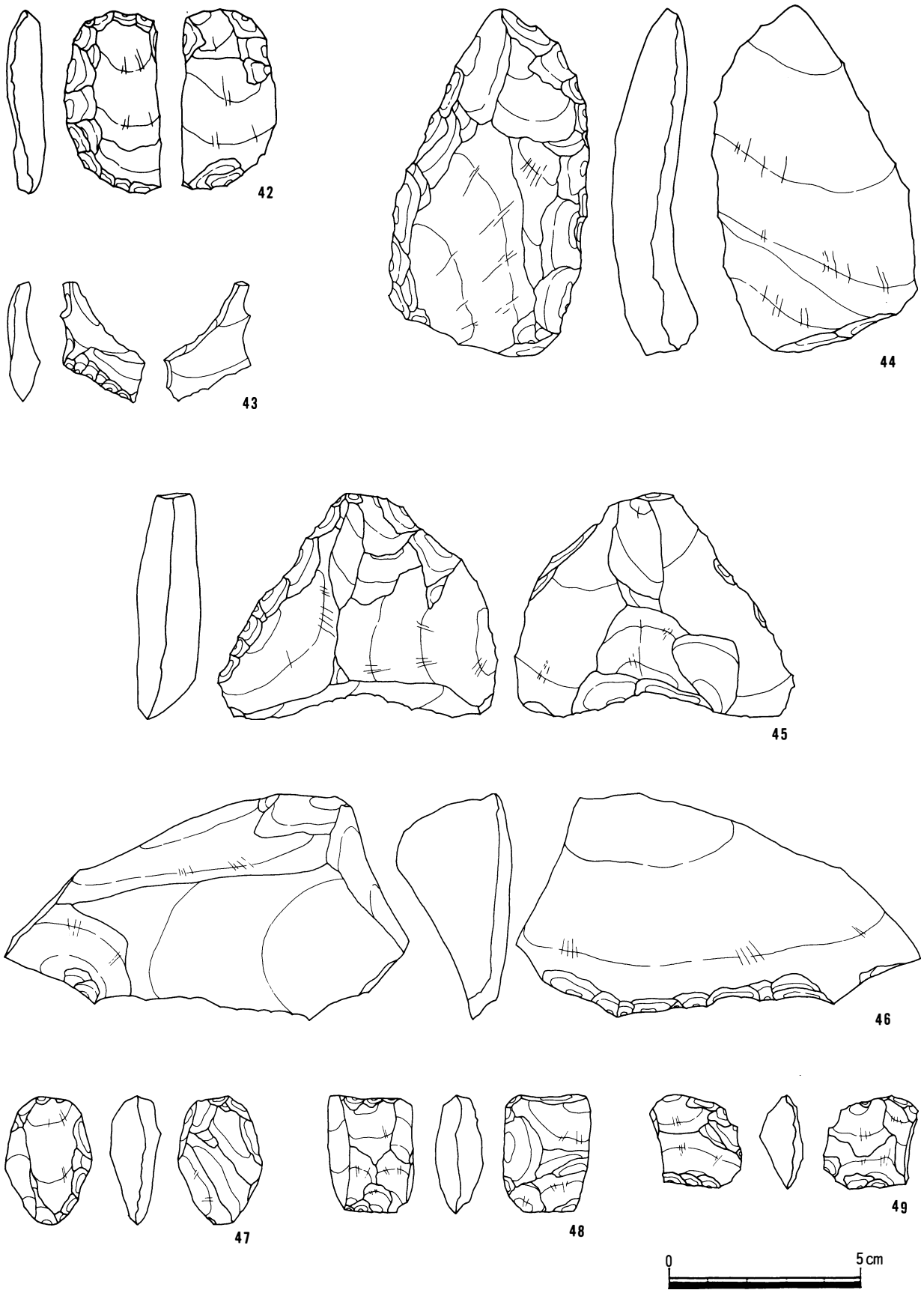
３点出土しているが、いずれも下呂石製である。

二次加工のある剥片（第17図50～55、図版９）

剥片の側縁に大小の剥離痕を連続して施したものを二次加工のある剥片とした。11点出土している。下呂石10点、チャート１点である。



第15図　石器類(2)石匙・削器



第16図 石器類(3)掻器・両極剥離痕のある石器

使用痕のある剥片（第17図56～58、図版９）

剥片の側縁に微細な剥離面が密接して、あるいは不規則に観察されるものを使用痕のある剥片とした。７点出土している。下呂石５点、チャート２点である。

石核（第17図59・60、図版９）

３点出土している。石材はいずれも下呂石である。図示した59・60は、ともに、打面を１か所に設定し、残核が板状を呈する。

剥片

包含層から出土した剥片類は583点である。石材は、下呂石525点（90.0%）、チャート40点（6.9%）、黒曜石13点（2.2%）、凝灰岩５点（0.9%）であり、やはり、下呂石が圧倒的に多い。

打製石斧（第18図、図版９）

52点出土している。遺物数の割りには比較的多いように思われる。次のように分類する。

１類　頭部がほぼ平行な、いわゆる短冊形。
２類　胴部がくびれる、いわゆる分銅形。
３類　形状が基部に向かって収束する、いわゆる撥形。

折損部位による分類
ａ　刃部を欠く
ｂ　基部を欠く
ｃ　基部の一部を欠く
ｄ　胴部のみ（両端を欠く）
ｅ　破片

形態別では、１類31点、３類７点、不明14点である。71と72は同一個体であるが、約４ｍ離れた地点から出土した。

磨石・凹石・敲石類（第19図、図版10）

この類の石器では、磨痕・凹痕・敲打痕など複数の痕跡が重複していることが多く、機能も多様であると考えられるが一括して扱うこととする。形態については、まず平面形および断面形によって次のように分類する。

１類　平面形が円形のもの。
２類　平面形が楕円形のもの。
３類　平面形が方形のもの。

１～３類は、その断面形によりさらに４つに細分した。

Ａ類　断面形が円形のもの。

Ｂ類　断面形が楕円形のもの。

Ｃ類　断面形が凸レンズ状のもの。

Ｄ類　断面形が方形のもの。

４類　角柱状や円柱状の自然礫を用いたもので、断面は多角形。

凹痕の数については、いわゆる表面・裏面・その他の面の個数を一覧表に示した。また、凹痕の形状について、次の１～３のように分類した。

１　敲打痕がかたまって浅い凹痕をつくっているもの。

２　すりばち状のはっきりした凹痕のあるもの。

３　右上がり状に広がる細長い凹痕を有するもの。

なお、磨面の状況については、ザラつく磨痕をＡ、滑らかな磨痕をＢとした。

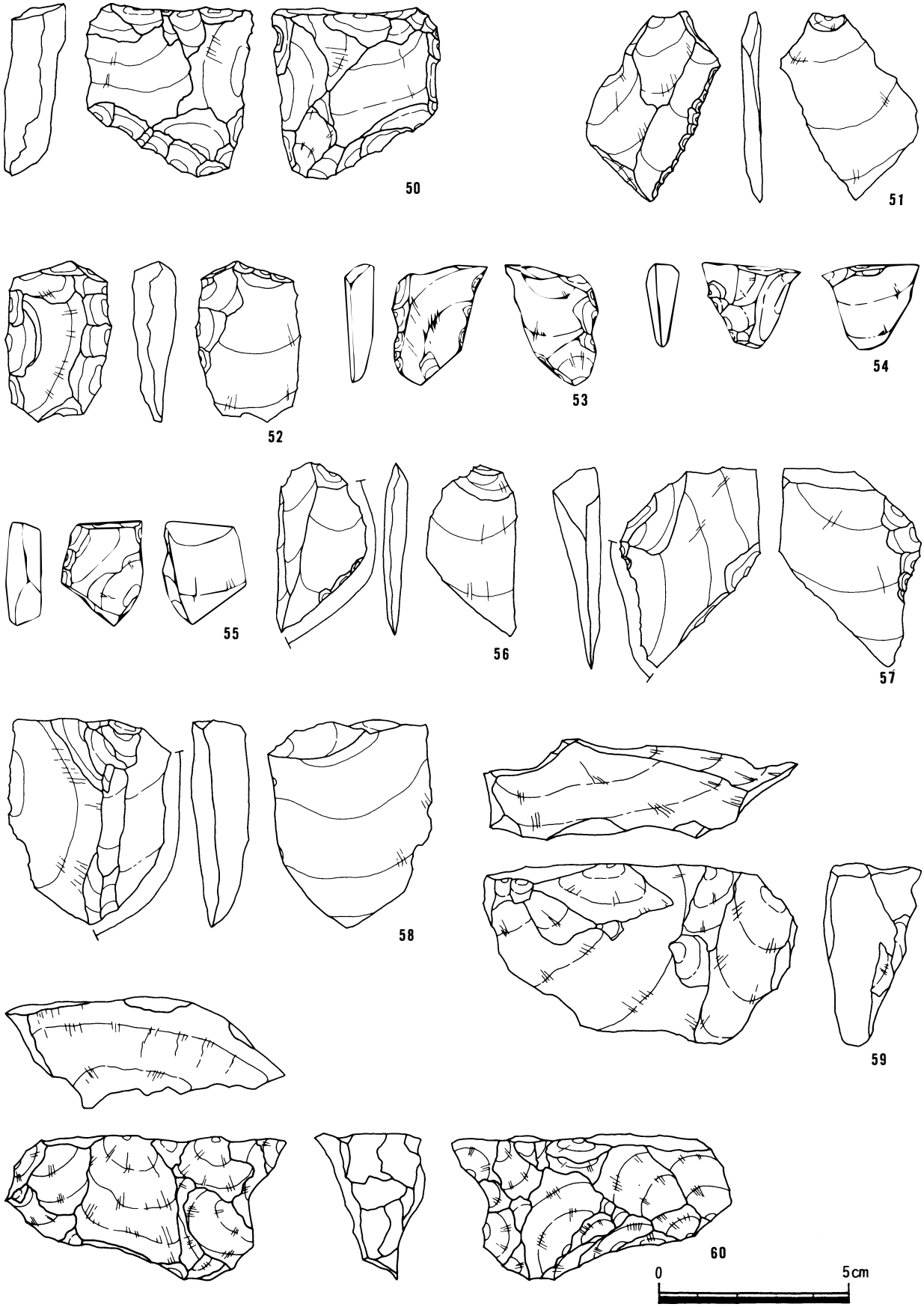
出土点数は15点である。形態別では、１Ｂ類１点、２Ａ類１点、２Ｂ類８点、２Ｃ類１点、４類１点、不明３点となっている。

形態に関しては、２Ｂ類が多い（全体の53%）。また、凹みを有するものは３点のみであり、いずれも、浅い凹痕をつくっているものであった。

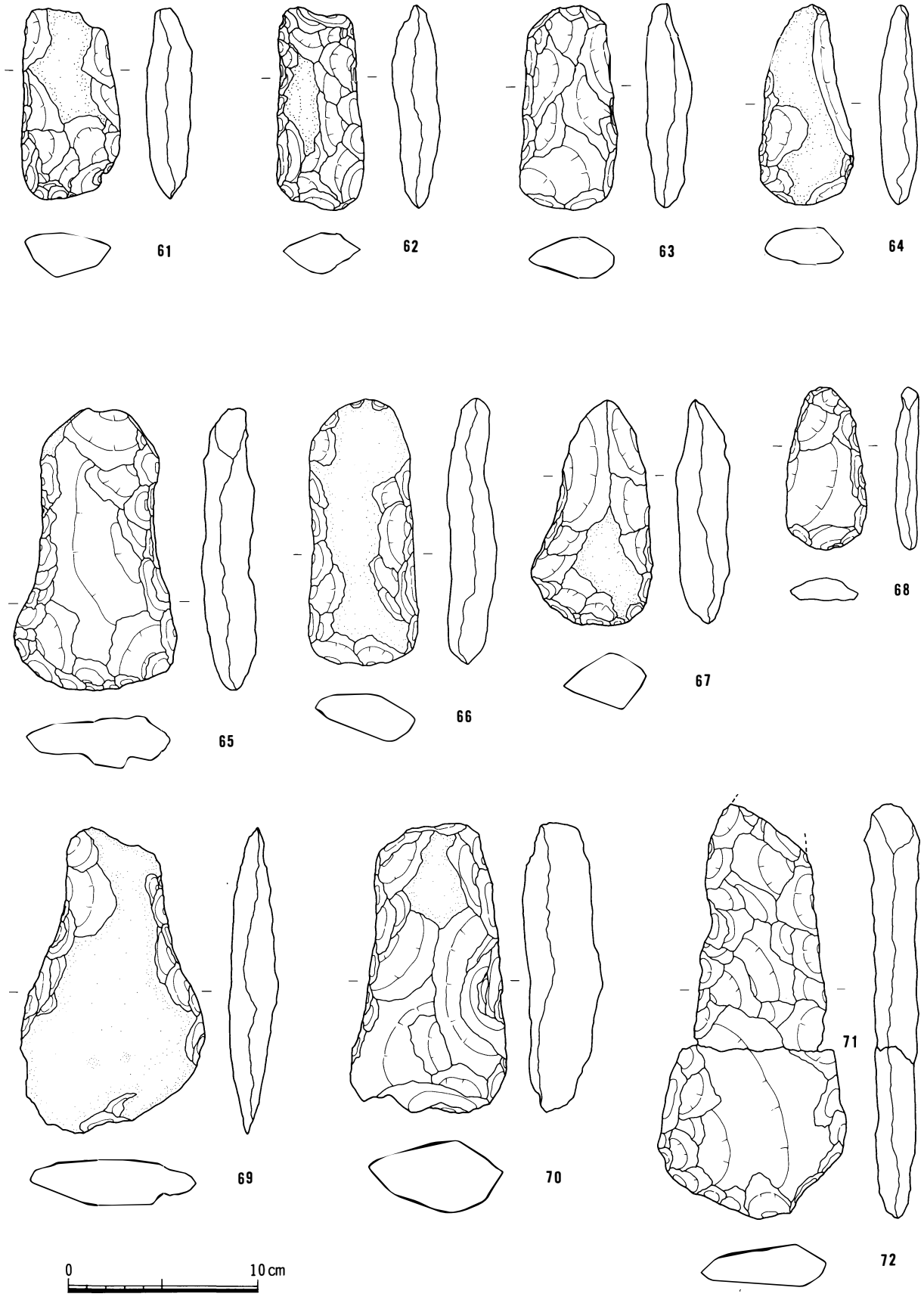
石皿

石皿は１点出土している。凝灰岩である。偏平な石で、３つに割れていたが、一部欠損している。

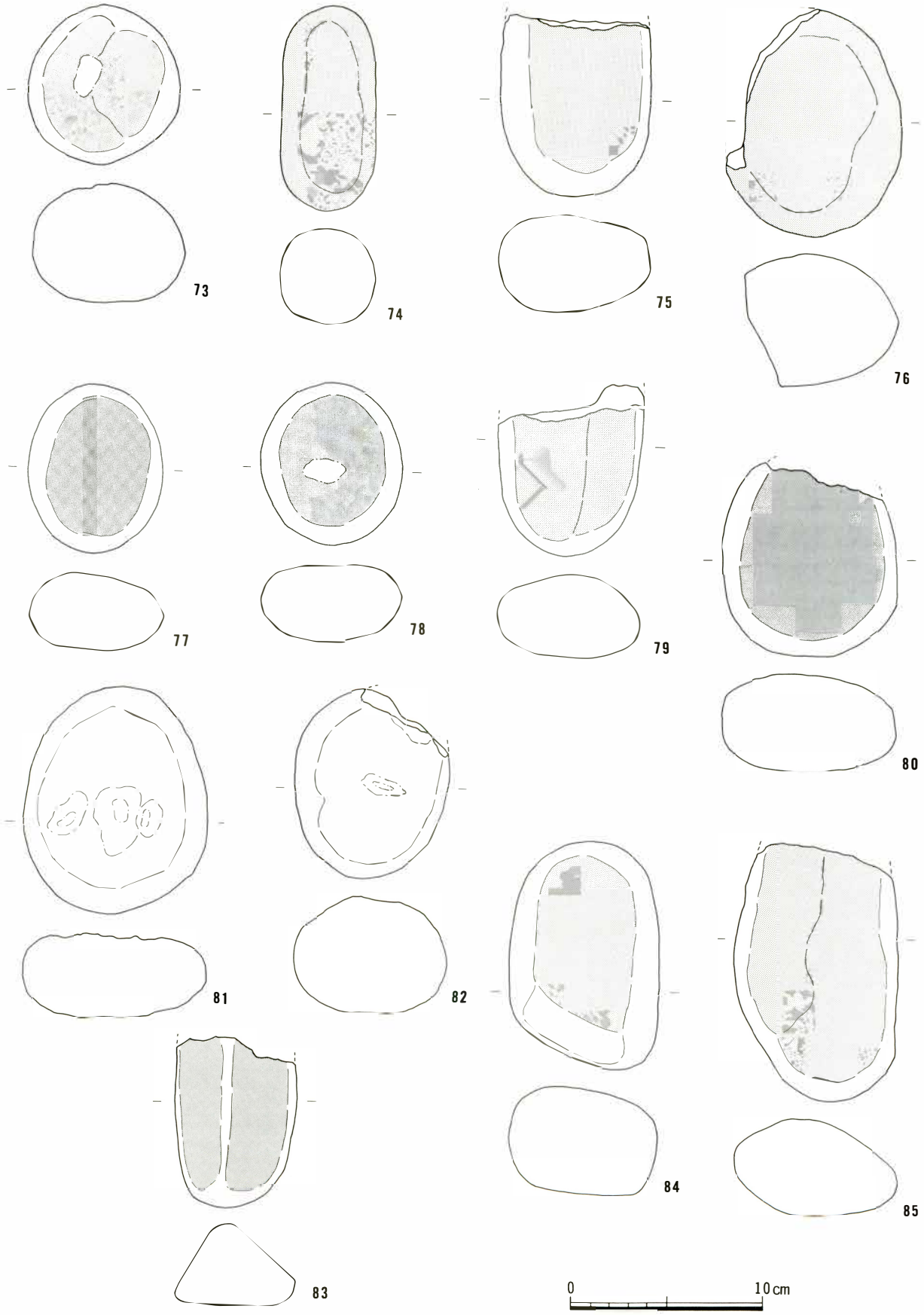
1）　分類に関しては、五味原遺跡群（岐阜県大野郡丹生川村）の発掘調査報告例を参考にした（上嶋ほか1997）。



第17図　石器類(4)二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石核



第18図　石器類(5)打製石斧



第19図　石器類(6)磨石・凹石・敲石類

第3表　石器一覧表

石鏃

番号	出土区	層位	石　材	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	分 類	打 損	挿図番号	備　　考
1	9 B	Ⅲ	下 呂 石	(1.5)	1.6	0.4	(1.0)	－	a		
2	12A	Ⅲ	下 呂 石	1.6	1.5	0.3	0.4	1 C		14－13	
3	12B	Ⅲ	下 呂 石	1.9	1.6	0.4	0.9	1 D		14－15	
4	12B	Ⅲ	チャート	2.2	1.9	0.4	1.1	1 B		14－ 5	
5	12B	Ⅲ	黒 曜 石	1.7	1.4	0.2	0.3	1 C		14－14	
6	12B	Ⅲ	下 呂 石	1.8	1.9	0.4	0.9	1 B			
7	12B	Ⅲ	下 呂 石	1.7	1.6	0.3	0.6	1 C		14－ 9	
8	12B	Ⅲ	下 呂 石	(1.8)	2.7	0.3	(1.5)	－	a		
9	12B	Ⅲ	チャート	1.5	1.1	0.4	0.5	1 B		14－ 6	
10	12B	Ⅲ	下 呂 石	2.3	1.0	0.2	(0.4)	2 B	i		
11	12B	Ⅲ	下 呂 石	2.7	1.1	0.4	0.7	1 B		14－ 4	
12	12B	Ⅲ	下 呂 石	2.9	1.7	0.4	0.5	1 B		14－ 7	
13	13B	Ⅲ	下 呂 石	(1.9)	2.3	0.4	(1.6)	－	a	14－24	
14	14B	Ⅱ	下 呂 石	2.6	1.8	0.5	1.7	1 B		14－ 2	
15	15B	Ⅱ	下 呂 石	(1.4)	1.7	0.5	(1.1)	－	a		
16	15B	Ⅲ	下 呂 石	(2.0)	(1.6)	0.4	(0.8)	－	e		
17	15B	Ⅲ	下 呂 石	2.4	(2.3)	0.4	(1.2)	1 C	b	14－ 8	
18	15C	Ⅱ	下 呂 石	(2.4)	2.1	0.5	(1.9)	－	a	14－26	
19	15C	Ⅲ	下 呂 石	1.7	1.4	0.3	0.5	1 C		14－12	
20	16B	Ⅱ	下 呂 石	3.3	1.9	0.4	1.8	1 F		14－17	
21	16B	Ⅱ	下 呂 石	3.4	1.5	0.8	3.5	1 F		14－18	
22	16B	Ⅱ	下 呂 石	(2.1)	2.2	0.4	(1.4)	－	a	14－25	
23	16B	Ⅱ	下 呂 石	(1.9)	1.5	0.4	(1.2)	－	a		
24	16B	Ⅱ	下 呂 石	(1.6)	1.9	0.3	(1.0)	－	a		
25	16B	Ⅲ	下 呂 石	(1.9)	1.7	0.5	(1.5)	－	a		
26	16B	Ⅲ	下 呂 石	(2.5)	(1.5)	0.5	(1.5)	－	h		
27	16B	Ⅲ	下 呂 石	2.1	1.6	0.3	0.7	1 A		14－ 1	
28	16B	Ⅲ	下 呂 石	(1.9)	(1.7)	0.3	(0.7)	－	e		
29	17B	Ⅲ	下 呂 石	(2.3)	1.4	0.4	(1.3)	－	a	14－21	
30	20A	Ⅲ	黒 曜 石	2.6	(1.1)	0.3	(0.4)	－	b	14－20	
31	20B	Ⅲ	下 呂 石	2.5	1.7	0.6	2.3	1 D			
32	20B	Ⅲ	下 呂 石	2.5	(1.4)	0.3	(0.8)	1 B	b	14－ 3	
33	20B	Ⅲ	下 呂 石	2.0	(1.6)	0.4	(0.9)	－	b	14－19	
34	20B	Ⅲ	下 呂 石	2.1	1.5	0.4	0.9	1 C		14－10	
35	20B	Ⅲ	下 呂 石	(1.7)	1.6	0.4	(0.9)	－	a	14－23	
36	20B	Ⅲ	下 呂 石	2.3	(1.4)	0.5	(1.0)	－	b	14－22	
37	20B	Ⅲ	下 呂 石	2.6	1.3	0.2	0.6	1 C	f		
38	21B	Ⅲ	下 呂 石	1.9	1.4	0.4	0.8	1 C		14－11	
39	21B	Ⅲ	下 呂 石	2.1	1.7	0.7	2.3	1 D		14－16	
40	21B	Ⅲ	下 呂 石	1.7	1.0	0.2	0.3	1 B			
41	表採		下 呂 石	(1.0)	(0.9)	0.3	(0.1)	－	h		

石錐

番号	出土区	層位	石　材	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	分 類	授図番号	備　　考
1	8 B	Ⅲ	下 呂 石	2.4	1.1	0.5	0.9	－	14－27	
2	15B	Ⅲ	下 呂 石	2.2	1.0	0.5	1.2	－		
3	15C	Ⅲ	下 呂 石	6.8	2.8	1.0	16.6	4 B	14－30	
4	20B	Ⅲ	チャート	3.6	1.9	0.8	4.8	4 B	14－29	
5	20B	Ⅲ	チャート	3.0	1.2	0.8	2.7	1 A	14－28	

石匙

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号	備　　考
1	10B	Ⅲ	下呂石	4.7	3.7	0.7	8.2		
2	11B	Ⅲ	下呂石	4.0	6.0	1.0	20.9	15－34	
3	19B	Ⅲ	下呂石	4.7	5.5	1.0	28.6	15－33	
4	19B	Ⅲ	下呂石	4.2	5.7	1.0	18.8	15－35	
5	20B	Ⅲ	チャート	3.3	4.1	0.8	7.5	15－32	

削器

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重　さ	分類	挿図番号	備　　考
1	13B	Ⅲ	下呂石	2.7	4.3	0.8	6.2	1	15－37	
2	16B	Ⅲ	下呂石	2.7	2.6	0.6	3.8	1		
3	16B	Ⅲ	下呂石	2.5	3.0	0.8	3.8	3		
4	19B	Ⅲ	下呂石	2.8	5.7	0.8	13.6	1	15－40	
5	19B	Ⅲ	チャート	2.8	4.8	0.8	8.7	1	15－36	
6	21B	Ⅲ	下呂石	3.2	6.4	1.5	18.0	1	15－41	
7	21B	Ⅲ	下呂石	3.5	5.6	0.8	15.4	1	15－38	
8	21B	Ⅲ	下呂石	6.3	3.4	1.4	19.1	1	15－39	

掻器

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重　さ	分類	挿図番号	備　　考
1	11B	Ⅲ	チャート	2.4	2.0	0.4	1.9	2		
2	13B	Ⅲ	下呂石	7.5	6.1	1.7	62.5	4	16－45	
3	14B	Ⅲ	下呂石	5.6	8.5	1.8	87.0	2	16－44	
4	16B	Ⅲ	チャート	2.3	3.1	0.7	3.4	4	16－43	
5	20B	Ⅲ	下呂石	6.5	9.6	2.6	104.2	2		
6	20B	Ⅲ	下呂石	2.7	4.8	0.8	12.5	2	16－42	
7	21B	Ⅲ	下呂石	5.5	10.8	3.0	118.1	4	16－46	

両極剥離痕を持つ石器

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号	備　　考
1	16B	Ⅲ	下呂石	3.4	2.3	1.2	8.5	16－47	
2	17B	Ⅲ	下呂石	2.5	2.6	1.1	6.2	16－49	
3	21B	Ⅲ	下呂石	3.2	2.2	1.2	9.1	16－48	

尖頭器

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号	備　　考
1	13B	Ⅲ	珪質頁岩	(8.1)	2.5	0.7	(17.3)	14－31	

二次加工のある剥片

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号	備　　考
1	12B	Ⅲ	下呂石	6.7	6.1	1.8	55.7		
2	14B	Ⅲ	下呂石	4.6	4.5	1.4	29.1	17－50	
3	14B	Ⅲ	下呂石	4.2	3.6	1.0	16.6		
4	14B	Ⅲ	チャート	2.8	2.2	0.9	6.9	17－55	
5	15B	Ⅲ	下呂石	3.3	2.5	0.7	5.3	17－53	
6	15B	Ⅲ	下呂石	5.1	3.2	0.4	6.9	17－51	
7	15B	Ⅲ	下呂石	3.3	3.0	0.7	7.4		
8	16B	Ⅲ	下呂石	4.3	2.7	1.0	10.6	17－52	
9	16B	Ⅲ	下呂石	2.8	4.9	0.8	7.7		
10	19B	Ⅲ	下呂石	2.6	2.8	0.8	3.7	17－54	
11	21B	Ⅲ	下呂石	3.0	3.2	0.8	5.4		

使用痕のある剥片

番号	出土区	層位	石　材	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	挿図番号	備　　考
1	12B	Ⅲ	下 呂 石	2.9	4.5	1.3	13.1		
2	13B	Ⅲ	下 呂 石	4.5	3.8	1.1	17.5		
3	14B	Ⅲ	下 呂 石	5.4	4.4	1.5	27.3	17－58	
4	15A	Ⅲ	下 呂 石	3.1	2.2	0.4	2.1		
5	15B	Ⅲ	チャート	4.9	4.1	1.2	19.2	17－57	
6	15B	Ⅲ	チャート	4.7	3.1	1.0	7.4		
7	19B	Ⅲ	下 呂 石	4.3	2.9	0.6	4.8	17－56	

打製石斧

番号	出土区	層位	石　材	長 さ	幅	厚 さ	重　さ	分類	折損	挿図番号	備　　考
1	9 B	Ⅱ	凝 灰 岩	(6.1)	(5.1)	1.0	(46.2)	－	b		
2	10B	Ⅱ	凝 灰 岩	(5.5)	(6.1)	(1.6)	(65.9)	－	b		
3	10B	Ⅲ	凝 灰 岩	10.8	4.9	2.0	159.5	1		18－63	
4	10B	Ⅲ	凝 灰 岩	(8.6)	5.7	1.9	(138.5)	1	a		
5	11B	Ⅱ	凝 灰 岩	(8.4)	5.1	(1.5)	(82.9)	1	b		
6	11B	Ⅱ	凝 灰 岩	(4.2)	(5.9)	(1.5)	(42.2)	－	b		
7	11B	Ⅱ	凝 灰 岩	(13.0)	(8.2)	3.4	(414.6)	－	a		
8	11B	Ⅲ	凝 灰 岩	(13.0)	7.8	4.2	(478.5)	1	d		
9	11B	Ⅲ	凝 灰 岩	(9.6)	(6.0)	2.2	(158.8)	－	a		
10	11B	Ⅲ	凝 灰 岩	(9.5)	5.8	2.7	(197.9)	1	b		
11	11B	Ⅲ	凝 灰 岩	(11.6)	9.8	3.1	(385.8)	－	b		
12	11B	Ⅲ	凝 灰 岩	(6.3)	(5.6)	2.2	(85.3)	－	b		
13	12B	Ⅲ	凝 灰 岩	(10.4)	5.9	2.9	(208.9)	1	b		
14	12B	Ⅲ	流 紋 岩	8.7	5.4	1.3	76.6	1			
15	12B	Ⅲ	凝 灰 岩	(8.9)	5.9	2.0	(150.3)	1	b		
16	12B	Ⅲ	凝 灰 岩	(7.3)	(5.5)	(2.3)	(84.4)	－	a		
17	12B	Ⅲ	凝 灰 岩	10.9	4.7	2.2	134.5	1		18－62	
18	12B	Ⅲ	凝 灰 岩	(10.8)	4.1	1.3	(66.1)	1	c		
19	13A	Ⅲ	凝 灰 岩	(7.2)	6.4	1.7	(113.3)	1	b		
20	13B	Ⅱ	凝 灰 岩	(11.1)	5.3	2.3	(199.9)	1	b		
21	13B	Ⅱ	凝 灰 岩	(9.0)	(5.9)	2.4	(147.0)	1	b		
22	13B	Ⅲ	凝 灰 岩	(9.6)	6.3	2.8	(201.9)	1	b		
23	13B	Ⅲ	凝 灰 岩	12.1	5.5	1.6	174.3	1			
24	13B	Ⅲ	凝 灰 岩	(8.1)	6.1	2.4	(143.5)	1	b		
25	13B	Ⅲ	凝 灰 岩	(4.5)	(4.4)	(0.9)	(18.1)	－	d		
26	13B	Ⅲ	凝 灰 岩	(6.2)	(5.6)	1.6	(72.9)	1	b		
27	13B	Ⅲ	凝 灰 岩	(6.3)	5.0	1.8	(83.9)	1	a		
28	14A	Ⅱ	凝 灰 岩	10.7	4.9	1.8	119.7	3		18－64	
29	14A	Ⅱ	凝 灰 岩	10.2	4.8	1.6	101.5	1			
30	14B	Ⅲ	凝 灰 岩	(7.2)	6.0	1.8	(115.3)	1	b		
31	15B	Ⅱ	凝 灰 岩	(8.9)	(5.9)	2.7	(188.0)	－	b		
32	15B	Ⅱ	凝 灰 岩	(4.6)	(3.7)	(0.9)	(15.9)	－	a		
33	15B	Ⅱ	凝 灰 岩	(10.0)	5.0	2.3	(152.9)	1	b	18－61	
34	15B	Ⅲ	凝 灰 岩	11.9	5.2	2.5	217.2	3		18－67	
35	15B	Ⅲ	凝 灰 岩	(8.8)	(5.2)	2.2	(104.0)	－	a		
36	15B	Ⅲ	凝 灰 岩	(6.0)	(3.9)	(2.3)	(57.6)	－	d		
37	15C	Ⅲ	凝 灰 岩	(9.2)	10.0	(2.1)	(236.5)	3	b	18－72	39と同一個体
38	16B	Ⅲ	凝 灰 岩	8.6	4.3	1.0	51.9	1		18－68	
39	16B	Ⅲ	凝 灰 岩	(13.4)	(6.8)	2.2	(294.6)	3	d	18－71	37と同一個体

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重　さ	分類	折損	挿図番号	備　　考
40	16B	Ⅲ	凝灰岩	(8.6)	6.5	(2.4)	(164.4)	1	b		
41	16B	Ⅲ	凝灰岩	9.1	5.3	1.2	129.6	1			
42	16B	Ⅲ	凝灰岩	(10.3)	6.2	2.2	(235.3)	1	b		
43	17B	Ⅲ	凝灰岩	(8.6)	(6.0)	(2.7)	(133.3)	—	b		
44	17B	Ⅲ	凝灰岩	14.1	5.8	2.4	267.1	1		18−66	
45	17B	Ⅲ	凝灰岩	9.1	4.7	1.5	88.6	1			
46	17B	Ⅲ	凝灰岩	(9.0)	6.0	1.9	(125.8)	1	b		
47	19B	Ⅲ	凝灰岩	(15.5)	(10.0)	2.3	(381.2)	3	a		
48	19B	Ⅲ	凝灰岩	(9.1)	(5.9)	1.9	(108.3)	1	a		
49	20B	Ⅱ	凝灰岩	15.0	8.5	2.6	398.3	3		18−65	
50	20B	Ⅱ	凝灰岩	(7.5)	5.3	1.4	(71.6)	1	a		
51	20B	Ⅲ	凝灰岩	16.2	9.6	2.3	376.6	3		18−69	
52	20B	Ⅲ	凝灰岩	15.3	8.3	3.8	565.5	1		18−70	

磨石・凹石・敲石

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類		磨面の状況	挿図番号	備考
								形態	凹みの数と形状			
1	12B	Ⅲ	凝灰岩	8.3	7.0	4.0	371.6	Ⅱb	・・	B	19−77	
2	13B	Ⅱ	凝灰岩	(10.1)	(9.5)	(7.3)	(876.0)	—	・・	A		
3	13B	Ⅱ	凝灰岩	(9.0)	(7.4)	(6.7)	(495.1)	—	・・	A		
4	13B	Ⅲ	砂　岩	12.2	7.7	5.4	766.2	Ⅳ	・・	A	19−84	
5	15B	Ⅱ	凝灰岩	11.8	(8.8)	6.5	(1008.3)	Ⅱb	・・	A	19−76	
6	15B	Ⅲ	凝灰岩	8.1	7.8	6.5	601.0	Ⅰb	・・	A	19−73	
7	15B	Ⅲ	凝灰岩	10.8	4.8	5.0	427.1	Ⅱa	・・	A	19−74	
8	15B	Ⅲ	凝灰岩	12.2	9.7	4.0	681.8	Ⅱb	3・0・0 : 1		19−81	
9	16B	Ⅱ	凝灰岩	(10.0)	8.0	5.9	(482.1)	Ⅱb	1・0・0 : 1	A	19−82	
10	18B	Ⅲ	凝灰岩	8.5	7.3	4.1	377.8	Ⅱb	1・0・0 : 1		19−78	
11	20B	Ⅲ	凝灰岩	(10.6)	9.0	4.6	(649.2)	Ⅱb	・・	B	19−80	
12	20B	Ⅲ	凝灰岩	(13.5)	8.5	4.4	(690.3)	—	・・	A	19−85	
13	20B	Ⅲ	凝灰岩	(13.9)	7.8	4.2	(377.8)	Ⅱb	・・	B	19−79	
14	21B	Ⅲ	凝灰岩	(9.8)	7.8	4.8	(560.0)	Ⅱb	・・	A	19−75	
15	21B	Ⅲ	凝灰岩	(9.2)	6.4	4.7	(337.0)	Ⅱc	・・	B	19−83	

石皿

番号	出土区	層位	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	備　　考
1	13B	Ⅱ	凝灰岩	(20.1)	(15.4)	(7.2)	(2780.0)	

第4章　まとめ

阿多粕遺跡の発掘調査の概要は、前章までで述べた通りである。本章では、発掘調査の成果をまとめ、その意義についてふれることにする。

阿多粕遺跡の所在地は、太平洋側と日本海側を結ぶ国道41号線から東へ約500ｍ入った所にあり、深い谷筋を上ると、意外と開けた扇状地があって、集落が営まれている。近世において、口留番所が置かれた所であり、第２章で述べた通り、かつては交通の要衝であった。

発掘調査の結果、遺物の出土状況から見て、遺跡の中心部は調査地点の東北の方に広がっていたようである。出土した遺物は磨耗が激しく、流れ込みの状況で出土したものが多かった。また、調査地点の西側は谷地形になっていた。安定した生活面の広がりは乏しく、残念ながら遺構は検出されなかった。しかし、遺物としては、最下層から尖頭器が出土し、縄文早期から晩期までの各時期の土器や石器が出土した。この地域に脈々と続いてきた生活の跡をかいま見ることができたのである。

出土遺物では、無文の土器片が多かった。有文の土器では、縄文時代後期中葉の土器片が比較的多かった。石器類では、石鏃や打製石斧が比較的多く出土したが、後期のものが多いのであろう。

遺物包含層の下層からは早期の土器が出土しているが、その中でも押型文土器が注目される。山形文のほか、楕円文の帯状施文の間に沈線が入るものがある。また、黒鉛入り土器も出土しており、沢式に比定される。同様の組成が、細越峠を越えて、阿多粕遺跡の東方約10kmの所にある大野郡朝日村中道遺跡の押型文土器に見られる。さらに、阿多粕遺跡からは尖頭器も出土しているが、細越峠から南へ約１kmの所にある朝日村西洞遺跡からは、神子柴型の大形尖頭器が出土している点も興味深い。古来より近世までさかんに利用された峠越えのルートは、縄文時代あるいはそれ以前においても、主要なルートであったのであろう。

量的には少しであるが、黒曜石も出土している。産地同定をしてみないと確定しないが、やはり、峠を越えてさらに信州方面とのつながりも十分予想される。ルートの解明は簡単には結論が出せない問題ではあるが、今後の研究課題となろう。

今回の阿多粕遺跡の発掘調査は、高山山林事業所のふるさと林道開設事業に伴う事前調査であったが、奇しくも、まさに縄文のふるさとの道に立地する遺跡の発掘調査であったと言える。

引用・参考文献

江馬ミサオ　1937 「渚出土縄文土器」『ひだびと』5－10
大野政雄・佐藤達夫　1967 「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53－2
大参義一　1972 「第3章　縄文時代」『岐阜県史』
加藤晋平・鶴丸俊明　1991 『図録・石器入門事典＜先土器＞』
角川日本地名大辞典編集委員会　1978 『角川日本地名大辞典』21 岐阜県
岐阜県　1972 『岐阜県史』通史編原始
岐阜県教育委員会　1962 『岐阜県遺跡目録』
　　1990 『改定版　岐阜県遺跡地図』
小林　繁　1969 「秋神中道遺跡」『飛騨春秋』14－10
　　1970 「朝日村西洞出土の尖頭器」『飛騨春秋』15－4
上嶋善治　1992 『門坂シズマ遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター
　　1993 『藤原遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター
上嶋善治ほか　1997 『カクシクレ遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター
鈴木道之助　1981 『図録石器の基礎知識』Ⅲ
戸沢充則 編　1994 『縄文時代研究事典』
林　魁一　1938 「岐阜縣に於ける住居跡と思はる石器時代遺跡及び石の蓋ありし縄文土器發見に就いて」『考古学論叢』9
菱村正文ほか　1972 『飛騨の街道』
飛騨考古土俗学会 編　1935 『飛騨石器時代遺蹟地名表』
増子康真　1995 「飛騨における縄文中期前葉土器群の検討」『飛騨と考古学』
山中一郎ほか　1982 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』
吉朝則富　1995 「飛騨の大形・中形尖頭器について」『どっこいし』第50号

1

2

1．遺跡遠景　2．発掘前の状況

図版2

1

2

3

1．遺跡全景　2．発掘後の状況　3．作業風景

1

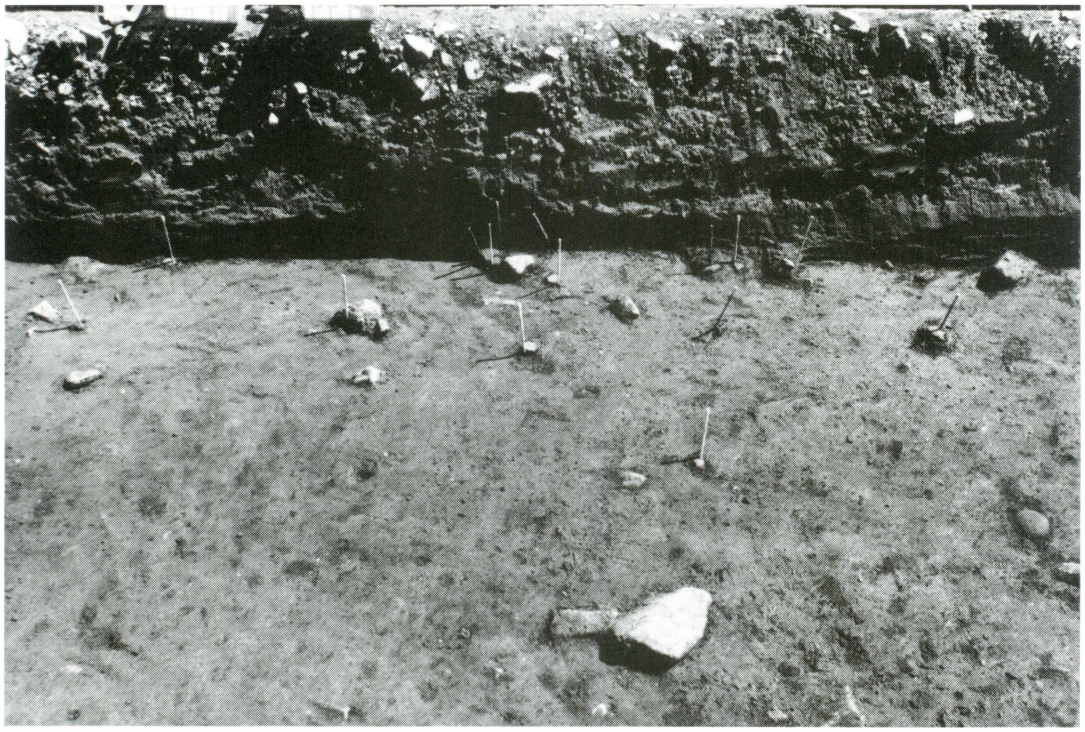
2

3

1．7Ｂ区トレンチ北壁　2．9Ｂ区トレンチ北壁　3．10Ｂ～11Ｂ区北壁

図版4

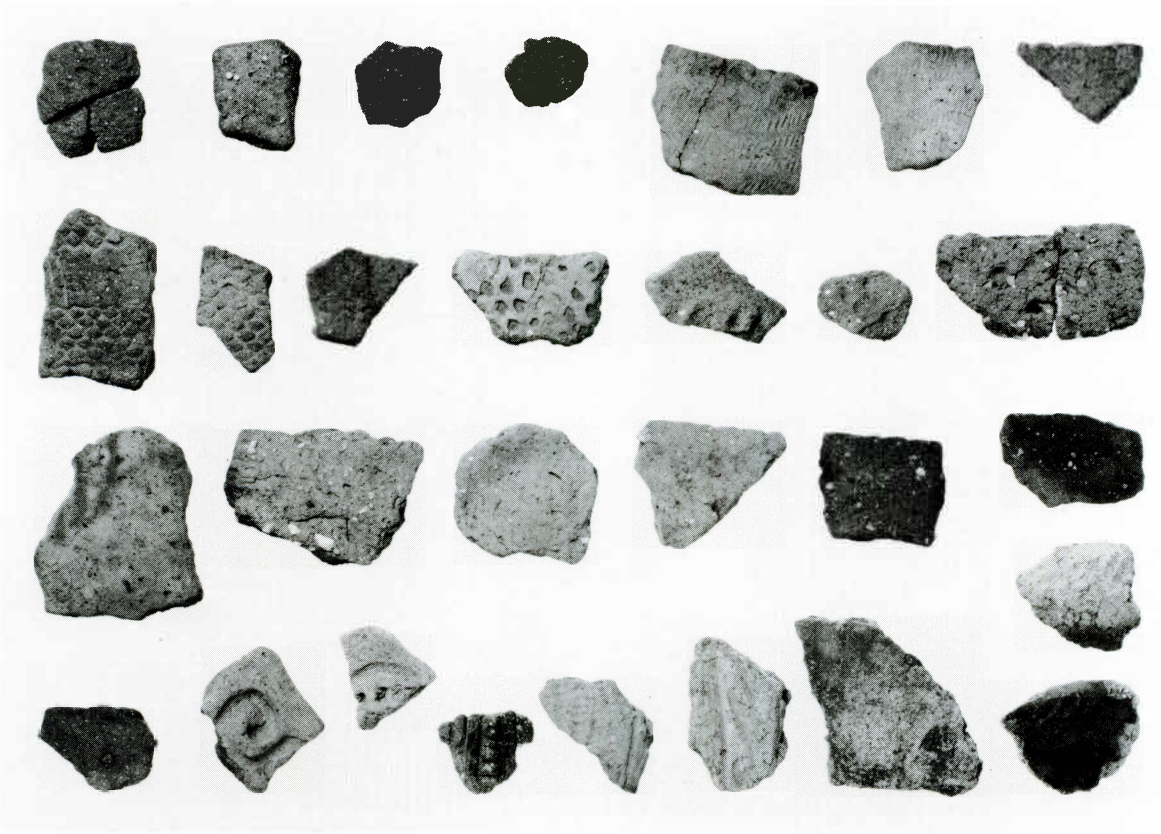
1



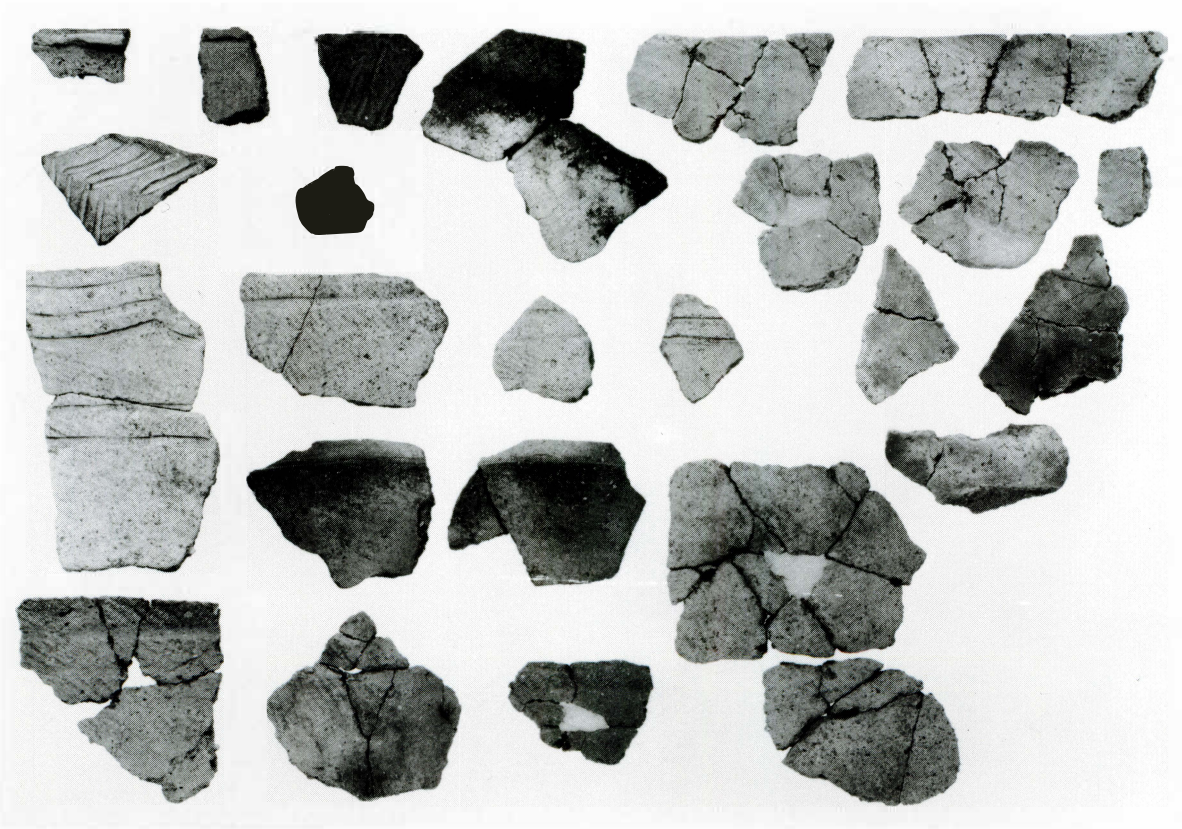
2

3

1．14B区北壁　2．遺物出土状況　3．尖頭器出土状況



1

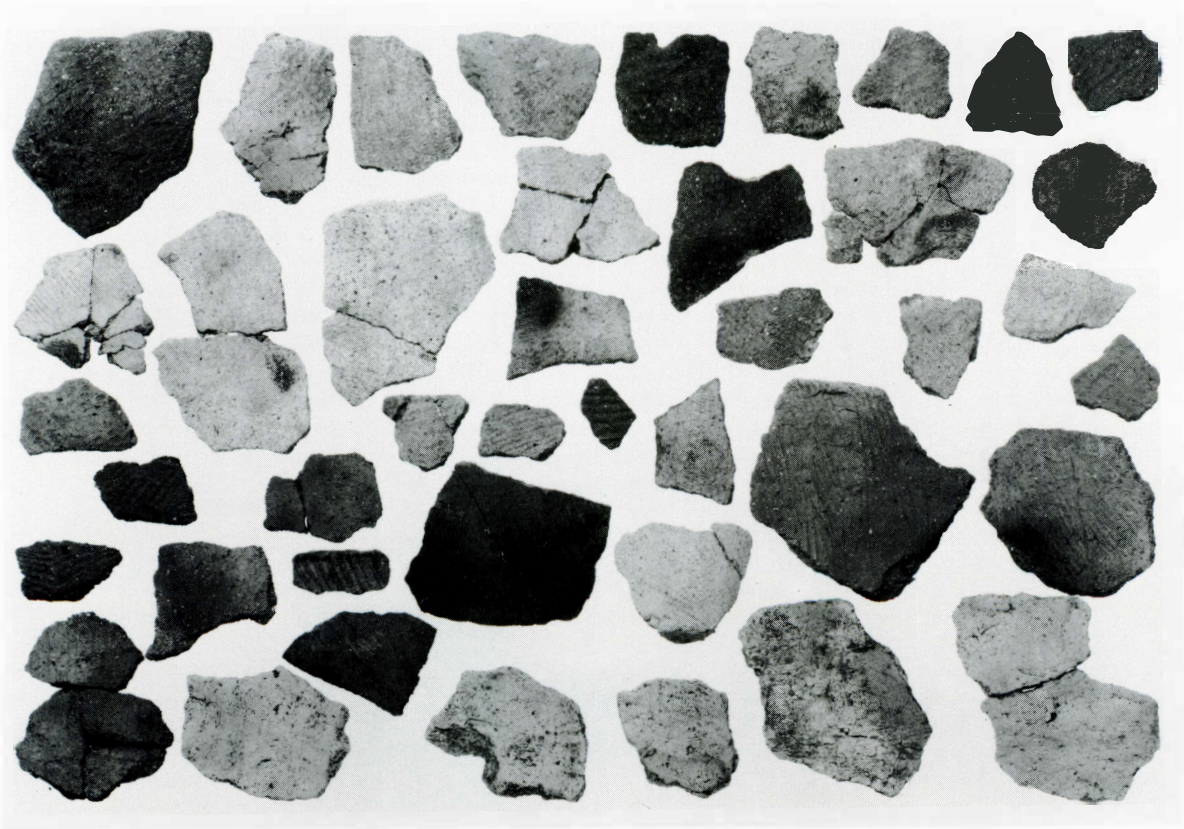


2

1．縄文土器 第Ⅰ・Ⅱ群　2．縄文土器 第Ⅲ群

図版6

1

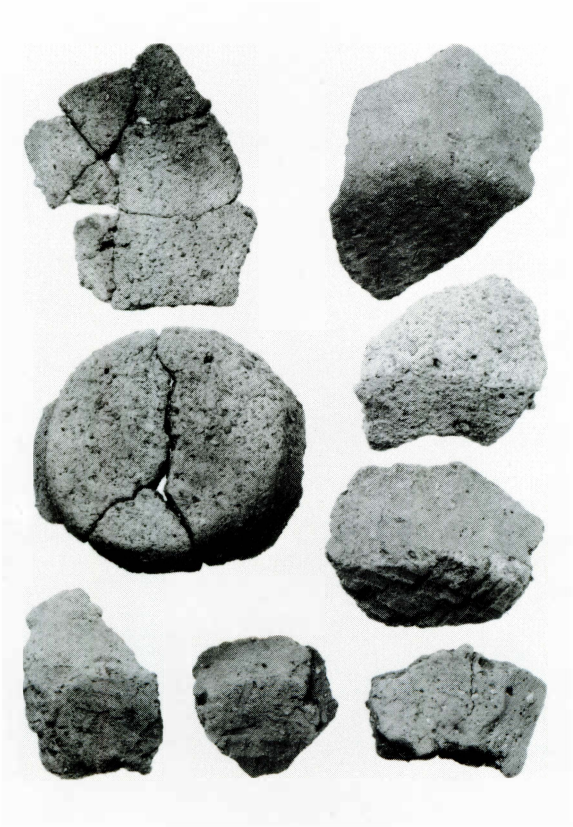


2

1．縄文土器 第Ⅳ群　2．縄文土器 第Ⅴ・Ⅵ群

1

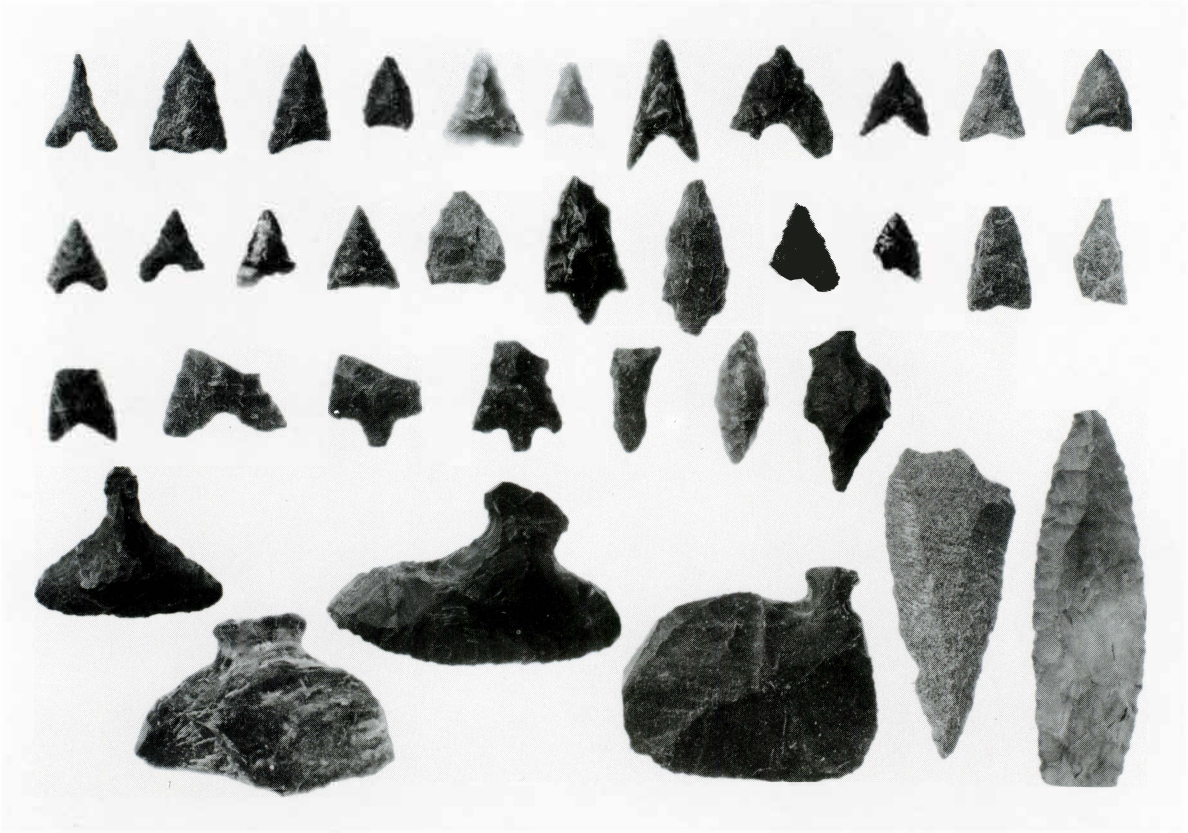
2



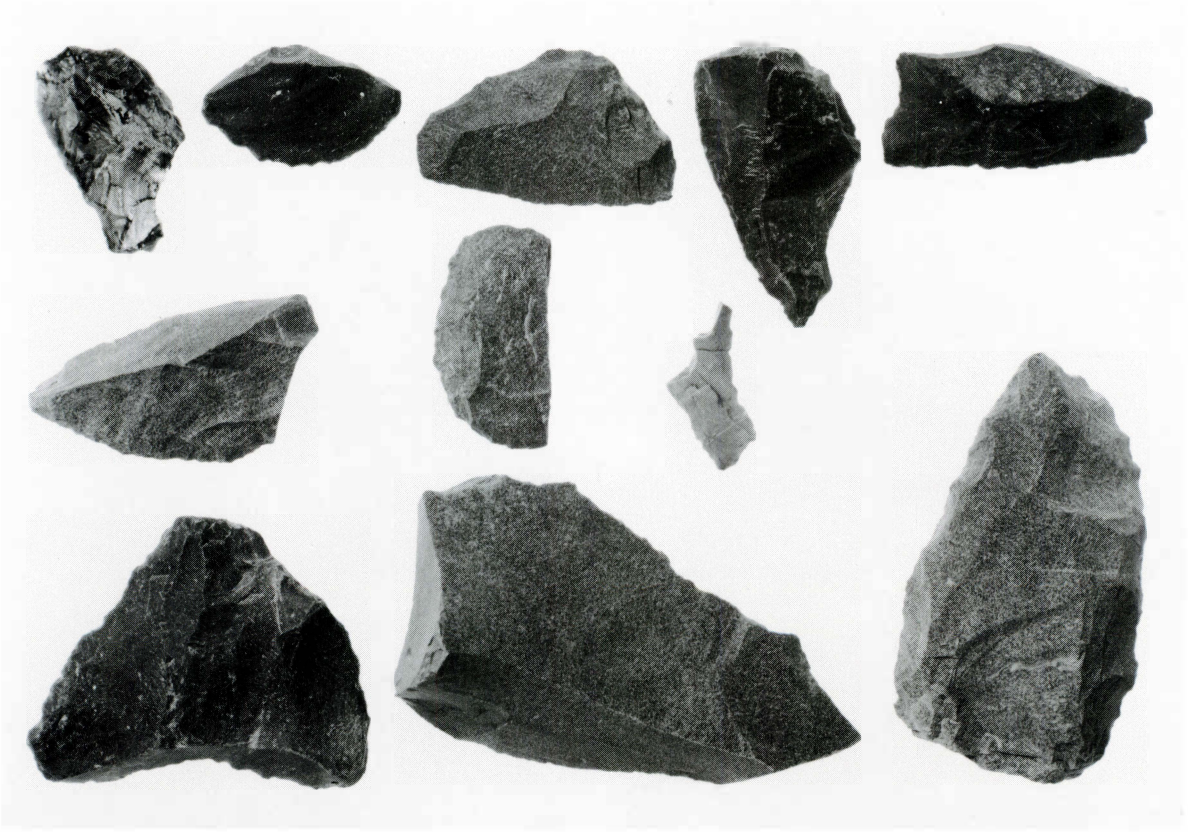
3

1・2．縄文土器 第Ⅶ群　3．縄文土器 底部

図版8

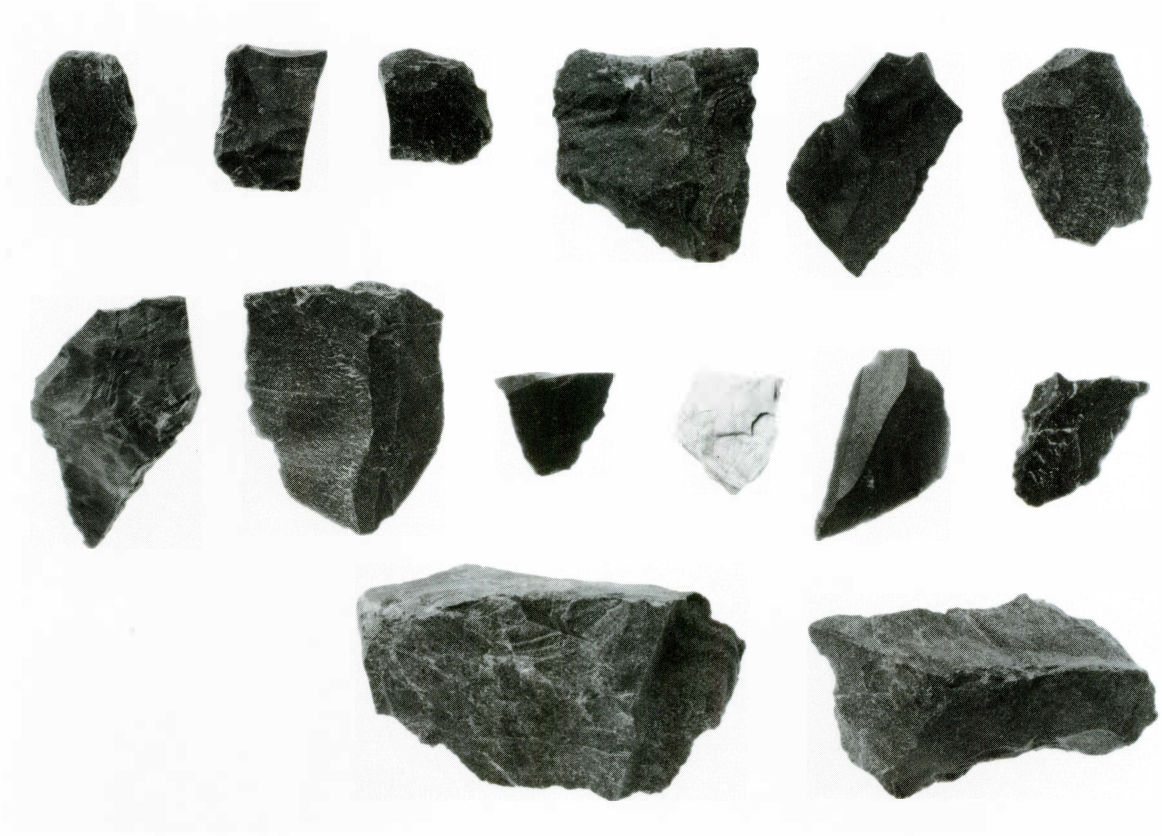


1



2

1. 石器類 石鏃・石錐・尖頭器・石匙　2. 石器類 削器・掻器



1

2

1．石器類 両極剥離痕のある石器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石核　2．石器類 打製石斧

図版10

1

1．石器類 磨石・凹石・敲石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	あたがすいせき
書　　名	阿多粕遺跡
副 書 名	ふるさと林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第41集
編著者名	上嶋善治　藤岡比呂志
編集機関	財団法人　岐阜県文化財保護センター
所 在 地	〒500-8708 岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）　TEL 058-264-1111(814)
発行年月日	1998年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
阿多粕遺跡（あたがす）	岐阜県大野郡（ぎふけんおおのぐん） 久々野町阿多粕（くぐのちょうあたがす）	21606	00685	35° 59′ 02″	137° 17′ 18″	19970516～ 19970704 300㎡	ふるさと林道線開設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阿多粕遺跡	散布地	縄文	なし	縄文土器 石器類（石鏃・石錐・石匙・打製石斧・尖頭器など）	遺構は検出されず。縄文土器は、早期から晩期まであるが、後期中葉が主である。石器類では、石鏃が比較的多い、尖頭器が1点出土。

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第41集

阿多粕遺跡

ふるさと林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月25日 印刷
1998年3月31日 刊行

編集・発行　財団法人岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）

印　刷　大　進　社　高山市有楽町40番地